

關西九館所藏

中國書畫錄

Ⅲ

前 言

中國書畫を所藏する關西の博物館・美術館の學藝員を中心とする關西中國書畫コレクション研究會では、藏品を相互に調査するなかで題跋や箱書等の釋讀を進めております。その成果は各館で開催する展覽會に反映され、また各會員の研究の糧ともなっております。しかしながら、こうした基礎資料は、研究會内部に留めることなく、廣く一般に公開することによって、国内外の研究者や愛好家のお役にたつべきものと考え、『關西九館所藏 中國書畫錄』を刊行してまいりました。本報告書は二〇一三年、二〇一五年に次ぐ第三冊で、南宋から元の書畫作品を採録しております。この度は、本會の研究に深いご理解を頂きました公益財團法人ポーラ美術振興財團様より、活動と報告書の作成にあたって貴重な助成を賜わり、本書の刊行に至ることができました。ここに衷心より御禮申し上げます。

二〇一八年三月

關西中國書畫コレクション研究會

凡例

- 一、本書は、關西九館（關西中國書畫コレクション研究會參加館：和泉市久保惣記念美術館・大阪市立美術館・觀峰館・京都國立博物館・黒川古文化研究所・泉屋博古館・澄懷堂美術館・藤井齊成會有鄰館・大和文華館）が所藏する書畫のうち、『中國書畫探訪』（二玄社、二〇一一年）掲載作品を中心に落款、題跋、鑑藏印、箱書などの文字資料を圖版・釋文・注解によって紹介することを目的に編纂した。
- 一、本卷には南宋から元時代の計九件を収録した。
- 一、各作品の記載項目は、箱書、裂、題簽、款記、跋、鑑藏印、付屬文書の順を原則としたが、作品の狀況と参照の便を考慮して適宜變更した箇所もある。
- 一、法量の單位はセンチメートルで、畫面の縦×横で表した。
- 一、釋文には、句點を施した。また作品に書かれた割注については、へゝを、押印箇所などの位置を示す場合には「」を用いた。
- 一、判讀できない文字は、「右半缺」や□□などと適宜表記した。
- 一、釋文中の年紀、地名、人名、書名や鑑藏印の押印者など、内容の理解に資する事項には注を付けた。また、傳來の過程や研究史に関する情報・知見について備考欄で解説した。
- 一、著録欄には、當該作品あるいはその可能性のある作品が収録される文献を挙げた。
- 一、参考文献欄には、その作品を研究する上で基礎となる論文、圖録などを挙げた。

一 幽竹枯槎圖 王庭筠筆

重要文化財

藤井齊成會有鄰館

金

紙本墨畫

三八・一×二七七・七

王庭筠自識「圖 1・2、原色圖版 1」

黃華山真隱、一行涉世、便覺俗狀可憎、時拈秃筆作幽竹枯槎、以自料理耳

鮮于樞跋「圖 1・3」

右黃華先生幽竹枯槎圖、并自題真跡、竊嘗謂古之善書者、必善畫、蓋書畫同一關樞、未有能此而不能彼者也、然鮮能竝行於世者、爲其所長掩之耳、如晉之二王、唐之薛稷、及近代蘇氏父子輩、是以書掩其畫者也、鄭虔、郭忠恕、李公麟、文同輩、是以畫掩其書者也、唯米元章書畫皆精、故竝傳於世、元章之後、黃華先生一人而已、詳觀此卷、畫中有書、書中有畫、天真爛熳、元氣淋漓、對之嗒然、不復知有筆矣、二百年無此作也、古人名畫非少、至能蕩滌人骨髓、作新人心目、拔汚濁之中、置之風塵之表、使之飄然欲仙者、豈可與之同日而語哉

大德四年上巳後三日、晚進漁陽鮮于樞謹跋

「虎林隱吏」(朱文方印)「圖 1・3・3」

「困學齋」(朱文方印)「圖 1・3・3」

趙孟頫跋「圖 1・4、1・4・1」

每觀黃華書畫、令人神氣爽然、此卷尤爲卓絕

孟頫

「趙氏子昂」(朱文方印)「圖 1・4・2」

袁桷跋「圖 1・4、1・4・1」

黃華老人、祖襄陽筆墨、至於平世不遇、卒寫其窮困流離、時使之然、豐祐之際、實不在米老下、文丹淵用墨、意在筆前、觀此卷、豈在彭城下耶、德常評古精詣、遂取其評以書

袁桷記

湯垕跋「圖 1・4」

士夫游戲於畫、往往象隨筆化、景發興新、豈含毫吮墨、五日一水、十日一石之謂哉、故畫家之極經營位置者、猶書家之工篆隸、士夫寓意筆墨者、猶書家之寫顛草、要非胸中富萬卷、筆下通八法、不能造其玄理也、金黃華王先生、文章字畫之餘、留心墨戲、得譽於明昌大定之間、此幽竹枯槎圖、迹簡意古、文雄字逸、可與古作者竝驅爭先、夫一時寄興之具、百世而下、見其斷

縑遺楮、使人景慕而愛尚、可謂能事者矣、東楚湯屋、手不忍置、贊曰

胸次磊落兮、下筆有神、書畫同致兮、罄露天眞、維茲古木兮、相友脩筠、信手幻化兮、咄嗟逡巡、一時之寓兮、百世之珍、卷舒懷想兮、如見其人

「湯屋」(白文方印)「圖 1.5.1」

「湯氏君載」(朱文方印)「圖 1.5.1」

馬居克跋「圖 1.5」

黃華此圖、今吏部尚書太原郝繼先參政家物也、蓋往歲倅太原日得之、雖官事鞅掌、往來燕趙齊魯吳楚之間、未嘗離身、一日友人石君民瞻欲之、情不可惜、割已好而與之、每過京口、必一展玩

大德八年秋九月十有二日再觀、馬居克復題

□仲微觀款「圖 1.5」

監察御史行臺事永清史□仲微同觀

龔璠跋「圖 1.6」

今代李仲方、高彥敬、暨李仲賓墨戲、皆自黃華老來、觀此益信、蓋磊落傾倒之意、先後猶一日也、古人文獻相傳類此

高郵龔璠書

「龔氏子敬」(朱文方印)「圖 1.6.1」

康里巉巖跋「圖 1.6」

黃華先生、人品□□□□、書畫莫不精妙、是以卿士大夫、用寶藏珍玩之、今觀此卷、使人情思灑然、於戲、安得一夢見之、與之論書哉

康里巉巖識

無名氏題詩「圖 1.6」

一株枯樹挂籐榛、老幹槎芽覆翠筠、好待九天新雨露、人間無處不宜春

班惟志跋「圖 1.7」

王子端先生、隱于黃華山、閒寫作此、宛如文與可游篔簹谷戲墨、蓋心領神會、傍若無人、余昔在錢唐、獲見雙松小竹、藏陶東臯家、風韻瀟灑、殆非此比也、當爲生平第一筆寶
後學班惟志頓首書

金應桂觀款「圖 1.7」

大德乙巳九日、金應桂敬觀

「蓀壁」(朱文瓢印)「圖 1·7·1」

元明善跋「圖 1·7」

王子端風猷英概、震盪可觀、此翰墨可見、想其揮灑凌厲之際、使人驚竦矣、德常寶之、蓋有爲也

清河元明善書

「明善」(朱文方印)「圖 1·7·2」

「復初」(朱文方印)「圖 1·7·2」

張寧跋「圖 1·8」

六書有象形之體、書與畫本一物也、然徒偏長于其事、而不達于其義、則又工史之爲耳、故先輩凡以書畫得名者、類皆文章之士、金黃華先生、王子端、人品甚高、號爲博雅、發於翰墨、往往爲世所重、此卷狀物寫情、微寓感激、當是變故後所作、故書與畫殊有奇崛跌蕩之氣、益以鮮于困學、趙松雪諸名公題識、可謂兼妙矣、東廣梁公景熙、清林茂範、賞鑑精詳、近者按節海邦、持以見示、展誦中、因憶古人潑墨成畫、縱酒作書、觀其形迹、若甚躁率、然繇神鑑素清、意度先定、下筆便自有法、故能絕俗出塵、優入佳品、豈非材會其全、而時出之者乎、知此則知子端之書畫矣、景熙公務時間、庶幾再過方洲、相與一議

成化丙申、吳興張寧書于方洲草堂

「清遠」(朱文連印)「圖 1·8·3」

「張氏靖之」(朱文方印)「圖 1·8·3」

「月舟」(朱文方印)「圖 1·8·3」

李士實跋「圖 1·9」

黃華書畫、漁陽、松雪、清河、恕齋、康里諸先生、題識盡矣、奚容復置喙其間、獨於此不能無感焉、諸先生生數百年之上、不可得而見矣、其雍容閒雅、英豪高古之氣象、手墨閒宛然可睹、拜觀之餘、令人悚然、彷彿周旋丈席下也、高山仰止、悠悠我心、丁酉二月上旬、後學豫章李士實、拜手漫題

「士實」(朱文方印)「圖 1·9·2」

鑑藏印

〔前綾〕「圖 1·1」

「蕉林書屋」(朱文長方印、梁清標)「圖 1·1·1」

〔繪畫部分〕

〔印文不明〕「圖 1·1·1」

「紫芝堂」(朱文方印、用印者未詳)

「蔡氏仲謙」(朱文方印、蔡仲謙)

「秋莊珍玩圖書」(朱文方印、用印者未詳)

「從心堂」(朱文長方印、用印者未詳)

「(印文不明)」

「梁清標印」(白文方印、梁清標)

「石渠寶笈」(朱文方印、清·高宗)

「(印文不明)」

「(印文不明)」

「乾隆御覽之寶」(朱文橢圓印、清·高宗)

「石渠定鑑」(朱文圓印、清·高宗)〔圖 1·1·2〕

「寶笈重編」(白文方印、清·高宗)

「嘉慶御覽之寶」(朱文橢圓印、清·仁宗)〔圖 1·1·3〕

「重華宮鑑藏寶」(朱文長方印、清·高宗)〔圖 1·1·4〕

「乾隆鑑賞」(白文圓印、清·高宗)〔圖 1·1·5〕

「宣統御覽之寶」(朱文方印、清·宣統帝)

「蒼巖子」(朱文圓印、梁清標)

「蕉林鑑定」(白文重廓方印、梁清標)

「(印文不明)」

「喬氏蕢成」(黑文方印、喬蕢成)

「三希堂精鑑璽」(朱文長方印、清·高宗)〔原色圖版 1〕

「宜子孫」(白文方印、清·高宗)

「趙氏子昂」(朱文方印、趙孟頫)

「騎縫」〔圖 1·1·5、原色圖版 1〕

「(印文不明)」

「采眞」(朱文連印、湯屋か?)

「蔡氏仲謙」(朱文方印、蔡仲謙)

「夏」(朱文長方印、用印者未詳)

「紫芝眞賞」(朱文方印、用印者未詳)

「蓀壁」(朱文瓢印、金應桂)

「玉芝」(朱文長方印、用印者未詳)

「秋莊珍玩圖書」(朱文方印、用印者未詳)

「玉芝□印」(白文方印、用印者未詳)

「李□□□」(朱文方印、用印者未詳)

「自識部分 冒頭下部」〔圖 1·1·5、1·2、原色圖版 1〕

「(印文不明)」

「(印文不明)」

「騎縫」〔圖 1·2·1〕

「蔡氏仲謙」(朱文方印、蔡仲謙)

「鮮于」(朱文圓印、鮮于樞)

「采眞」(朱文連印、湯屋か?)

「蓀壁」(朱文瓢印、金應桂)

「漁陽」(朱文長方印、鮮于樞)

「秋莊珍玩圖書」(朱文方印、用印者未詳)
「(印文不明)」

「末尾」[圖 1.2.2]

「宣統鑑賞」(朱文方印、清·宣統帝)

「無逸齋精鑑璽」(朱文長方印、清·宣統帝)

「(印文不明)」

「蔡氏仲謙」(朱文方印、蔡仲謙)

「紫芝」(白文方印、用印者未詳)

「楊□□□」(白文方印、用印者未詳)

「□□□□」(白文方印)

「兪庸⁽⁷⁾」(白文方印、兪庸)

「時中氏」(白文方印、兪庸)

「秋莊珍玩圖書」(朱文方印、用印者未詳)

「(印文不明)」

「(印文不明)」

「騎縫」[圖 1.2.2]

「河北棠邨」(朱文方印、梁清標)

「後隔水」[圖 1.2.2]

「隆裕皇太后御覽之寶」(朱文方印、隆裕皇太后)⁽⁷⁸⁾

「蕉林」(朱文方印、梁清標)

「淨心抱冰雪」(白文重廓方印、梁清標)

「騎縫」[圖 1.2.2、1.3]

「秋碧」(朱文瓢印、梁清標)[圖 1.3.1]

「鮮于樞跋騎縫」[圖 1.3]

「河北棠邨」(朱文方印、梁清標)[圖 1.3.2]

「袁桷跋騎縫」[圖 1.4、1.4.1]

「采眞」(朱文連印、湯屋か?) [圖 1.4.3]

「湯屋跋後騎縫」[圖 1.5]

「秋碧」(朱文瓢印、梁清標)[圖 1.5.2]

「龔璠跋後騎縫鑑藏印」[圖 1.6]

「沼溪漁隱」(朱文長方印、用印者未詳)[圖 1.6.2]

「元明善跋後騎縫」[圖 1.8]

「(印文不明)」[圖 1.8.1]

「河北棠邨」(朱文方印、梁清標) [圖 1・8・2]

〔張寧跋後騎縫〕 [圖 1・9]

「秋碧」(朱文瓢印、梁清標) [圖 1・9・1]

〔李士實跋次紙〕 [圖 1・10、1・10・1]

「蒼巖子梁清標玉立氏印章」(朱文方印、梁清標)

「觀其大略」(白文方印、梁清標)

注

- (1) 王庭筠 一一五六―一二〇二。金の文人。字は子端。熊嶽(遼寧省)の人。大定十六年(一一七六)進士となり、明昌元年(一一九〇)、文才を買われ館職を授けられそうになったが反対にあい、一時官を去り、新德(河南省)の黃華山寺に隱棲し、黃華老人と號した。明昌三年に應奉翰林文字となり、祕書郎の張汝方とともに命を受けて法書名畫を品第した。ついで翰林修撰となったが、承安元年(一一九六)に、趙秉文の筆禍事件に座して解職された。泰和元年(一二〇一)に同官に復職したが、翌二年に四十七歳で卒した。傳は『金史』卷一二六。(2) 黃華山 河南省林州市の西北にある山。『金史』卷一二六、王庭筠傳には「乃卜居彰德、買田隆慮、讀書黃華山寺、因以自號」とある。『明一統志』卷二八、彰德府、山川の條には「黃華山在林縣西二十里(中略)、金王庭筠嘗隱居於此」といい、清・顧祖禹『讀史方輿紀要』卷四九、林縣、隆慮山は「一名黃華山、有黃華谷。其北崖出瀑布、

曰黃華水」とする。

(3) 一行 ひとたび、一經。

(4) 幽竹 しげった竹、奥深く靜かな竹。

(5) 枯槎 枯枝、老樹の枝。寒さや衰亡を連想させる一方で、『莊子』齊物論篇に説かれる「檣木死灰」の故事から、寂寞として無情なさま、さらには脱俗の境地、或いは逆境にも動じない精神的強さの隱喩にもなり、北宋の文同・蘇軾以来、文人畫の畫題として好まれる。また、前漢の張騫が槎に乗って黃河を遡って行ったところ、天の川へたどり著き、牽牛、織女と會ってきたという傳説(周密『癸辛雜識』前集・乗槎に引く『荆楚歲時記』)から、枯槎にもそのイメージが投影される場合がある。

(6) 料理 ここでは排遣(うさをはらす)の意。

(7) 鮮于樞 一二五六―一三〇一。元の文人。字は伯機、號は困學民、直奇老人。漁陽(河北省)の人。官は太常寺典簿に至った。

(8) 古之善書者、必善畫、蓋書畫同一關樞 『畫繼』卷三・周純の條に、「每謂人曰、書畫同一關樞、善書者又豈先朽而後書耶」とある。

(9) 二王 東晉の王羲之、王獻之父子。『歷代名畫記』卷五に傳あり。

(10) 薛稷 唐代の書家。畫も描き六鶴圖の創始者として知られる。『歷代名畫記』卷九。

(11) 蘇氏父子 蘇軾とその息子の蘇過。ともに『畫繼』卷三に畫事あり。

(12) 鄭虔 唐の文人。玄宗から詩書畫三絶を稱された。『歷代名畫記』卷九。

(13) 郭忠恕 北宋初期の文人。篆書・隸書を善くし、畫は建築物を描く屋木畫・界畫で知られる。『宋史』卷四四三、『圖畫見聞誌』卷三。

(14) 李公麟 北宋後期の文人畫家。熙寧三年(一〇七〇)の進士。『宋史』卷四四四、『宣和畫譜』卷七。

(15) 文同 北宋後期の文人畫家。墨竹で名高い。『宋史』卷四四三。『圖畫見聞誌』卷三。

(16) 米元章 北宋後期の文人・米芾のこと。書畫ともに善くした。元章は字。『宋史』卷四四四。『畫繼』卷三。

(17) 畫中有書、書中有畫 南宋・胡仔『茗溪漁隱叢話』前集卷一五、王摩詰「東坡云、味摩詰之詩、詩中有畫、觀摩詰之畫、畫中有詩」を踏まえる。

(18) 嗒然 我を忘れる様。うっとりする様。

(19) 二百年無此作也 歐陽脩「梅聖俞墓誌銘并序」(『歐陽文忠公文集』卷三三)の「初在河南、王文康公見其文歎曰、二百年無此作矣」を踏まえる。

(20) 蕩滌 洗い清める。

(21) 大徳四年 一三〇〇年。

(22) 晩進 後繼者。

(23) 趙孟頫 一二五四〜一三二二。元の代表的な文人。字は子昂、號は松雪道人など。

(24) 爽然 爽やかなさま。

(25) 卓絶 特にすぐれていること。

(26) 袁桷 一二六六〜一三二七。元の文人。字は伯長、號は清容居士。鄞縣(浙江省)の人。官は翰林侍講學士に至った。傳は『元史』卷一七二。本跋は彼の『清容居士集』卷四七に「題王黃華墨竹」として収録。ただし文章の一部に異同がある。

(27) 襄陽 米芾のこと。本貫の襄陽(湖北省)から、襄陽漫士と號した。

(28) 豐祐之際 北宋の元豐(一〇七八〜八五)・元祐(一〇八六〜九四)年間。

(29) 米老 米芾をさす。

(30) 文丹淵 文同のこと。丹淵はその文集の名。

(31) 意在筆前 「王右軍題衛夫人筆陣圖後」(『法書要録』卷一)の「夫欲書者先乾研墨、凝神靜思、預想字形大小偃仰平直振動、令筋脈相連、意在筆前、然後作字、若平直相似狀如算子上下方整前後齊平、此不是書但得其點畫爾」を踏まえる。また、蘇軾「簞籥谷偃竹記」(『經進東坡文集事略』卷四九)に「故畫竹必先得成竹於胸中、執筆熟視、乃見其所欲畫者、急起從之、振筆直遂以追其所見、如兔起鶻落、少縱則逝矣。與可(文同の字)之教予如此」とある。

(32) 彭城 徐州の古稱で、ここでは同地に赴任した蘇軾をさす。前注、蘇軾「簞籥谷偃竹記」に「與可以書遺余曰、近語士大夫、吾墨竹一派、近在彭城、可往求之、韞材當萃於子矣」とあるのを踏まえる。蘇軾は熙寧十年(一〇七七)に知徐州となった。

(33) 徳常 元末明初の張經、字徳常のことか。張士誠に仕えて地方官として江南に赴任し、鄭元祐『僑吳集』、倪瓚『清閨閣集』など同時代の文集にしぼしば名がみえる。

(34) 湯屋 字は君載、號は采眞子。その先は淮安山陽だが、父の代に京口(江蘇省)に移り、丹陽(江蘇省)の人となった。學問を修めるかわら、畫の賞玩にも詳しく、至順年間の初め、都に出て祕府收藏の畫を見るを得て、柯九思と畫を論じたという。著に『畫鑑』があり、本圖も著録される。「金人王庭筠、字子端、畫枯木竹石、山水、往往見之、獨京口石民瞻家幽竹枯槎圖、武陵劉進甫家山林秋晚圖、上逼古人、胸次不在元章之下也」。

(35) 五日一水、十日一石 杜甫が同時代の山水樹石畫家である王宰について詠った「戲題王宰畫山水圖歌」(『分門集注杜工部詩』卷一六)の句「十日畫一水、五日畫一石」による。雜事に束縛されず、興の乗った時にだけ描く作畫態度を評したもの。

- (36) 經營位置 南齊・謝赫『古畫品錄』序に説かれる「畫の六法」の第五に擧げられ、構圖を指す。
- (37) 胸中富萬卷 黃庭堅「老杜浣花谿圖引」(『山谷集外集』卷四)の「拾遺流落錦官城、故人作尹眼爲青、碧雞坊西結茅屋、百花潭水濯冠纓、故衣未補新衣綻、空蟠胸中書萬卷(後略)」を踏まえるか。
- (38) 通八法 書の筆法を「永」字の八つの點畫で示す「永字八法」のこと。唐・張懷瓘『玉堂禁經』などに見える。
- (39) 明昌大定之間 金・世宗の大定年間(一一六一〜八九)、章宗の明昌年間(一一九〇〜九六)。
- (40) 馬居克 未詳。
- (41) 郝繼先 郝天挺(一二四七〜一三一一)、字は繼先、號は新齋。太原(山西省)の人。世宗のとき雲南行省參政から、中書左丞となり、仁宗朝では御史中丞、河南行省平章政事などを務めた。傳は『元史』卷一七四。
- (42) 石君民瞻 元の文人・石巖(一二六〇〜一三四四以後)のこと。字は民瞻、號は汾亭。鎮江(江蘇省)の人。彭澤縣尹となった。書畫の鑑賞に詳しく、題跋が多く残る。前掲の湯屋『畫鑑』にも本圖の所藏者としてみえる。『書史會要』卷七、『元詩選癸集』に小傳がある。
- (43) 京口 江蘇省鎮江市丹徒區。
- (44) 大德八年 元・成宗の年號。一三〇四年。
- (45) 仲微 未詳。
- (46) 龔璠 一二六六〜一三三一。字は子敬、鎮江(江蘇省)の人で、平江(江蘇省蘇州)に住んだ。官は江浙儒學副提學で致仕した。著に『存悔齋稿』が現存。黃潛撰の墓誌銘(『黃金華集』卷三三)がある。
- (47) 李仲方、高彥敬、暨李仲寶 本圖を著録する『石渠寶笈續編』第二九、重華宮藏六は「方」を「芳」に作る。また「暨」字はない。衍字と判断か。李仲方は、『圖繪寶鑑』卷五に「李有、字仲方、先名立義、燕人、官至兩浙運司經歷、善古木竹石、筆意高遠、作者推服」とある李有か(同卷には、李士傳、字仲芳という畫家もいるが、經歷は明らかでない)。彥敬は米法山水を善くした高克恭の字。仲寶は枯木竹石で知られる李衍の字。なお張伯淳『養蒙先生文集』卷五「題李仲方墨戲」に、李仲方が、李衍のために描いた畫がみえる。
- (48) 康里巉巖 一二九五〜一三四五。字は子山、號は正齋。色目人。官は集賢待制、奎章閣に侍して書畫の鑑識に當たり、翰林學士承旨に至った。能書で知られる。
- (49) 人品(以下の缺字) 本圖を著録する『石渠寶笈續編』第二九、重華宮藏六の缺字の數に従う。
- (50) 『石渠寶笈續編』第二九、重華宮藏六では、本詩を無落款とする。なお、本詩は『四庫全書』にも未收録。
- (51) 籐榛 籐は蔓性の植物、榛はここではやぶの意。
- (52) 芽 『石渠寶笈續編』では、「枿」に作る。
- (53) 班惟志 元の文人。字は彥功、號は恕齋。大梁(河南省)の人。官は至正年間の初に江浙儒學提學、ついで集賢待制に至った。『書史會要』卷七、『元詩選癸集』小傳。
- (54) 文與可游篔簹谷戲墨 篔簹は洋州(陝西省)にある谷の名。蘇軾「篔簹谷偃竹記」(前出)を踏まえる。
- (55) 傍若無人 人のことを気にせず、自分勝手に振舞うこと。『後漢書』延篤傳。
- (56) 陶東臯家 未詳。「東」字は『石渠寶笈續編』の本圖著録に従った。
- (57) 金應桂 字は一之、號は蓀壁。錢塘(浙江省)の人。宋に縣令を務めたが、元には風篔簹嶺に隱居した。詩書畫を善くし、書は歐陽詢を、畫は李公麟の佛畫を學んだ。『書史會要』卷三。

- (58) 大徳乙巳 大徳九年(一三〇五)。
 (59) 元明善 一二六九〜一三二二。字は復初、清河(河北省)の人。若くして呉に遊び、文名があった。仁宗により翰林待制に拔擢され、翰林學士に至った。傳は『元史』卷一八一、『書史會要』卷七。
 (60) 徳常 注(33)参照。
 (61) 張寧 字は靖之、號は方洲。海鹽(浙江省)の人とも、嘉興の人ともいう。景泰五年(一四五四)の進士。詩書畫を善くした。傳は『明史』卷一八〇。文集『方洲集』があり、本跋も卷二〇「黃華老人王廷筠書畫跋」として収録されている。
 (62) 六書有象形之體 六書は漢字を構成する六種類の法。象形はその一。
 (63) 書與畫本一物 蘇軾「書鄒陵王主簿所畫折枝二首」(『東坡全集』卷一六)の「詩畫本一律、天工與清新」を踏まえるか。『宣和畫譜』卷一六、黃居寶條にも「書畫本一體」とある。
 (64) 當是變故後所作 王庭筠が一時、御史臺の彈劾により官を辭め隱棲した後、明昌三年に再び召されたことを指す。
 (65) 鮮于困學、趙松雪 鮮于樞と趙孟頫。前出。
 (66) 東廣梁公景熙 『方洲集』(四庫本)は「東廣景純梁公」に作る。清『廣東通誌』卷四五、人物志に伝のある梁昉(字は景熙、順徳の人、官は浙江按察僉事などを務めた)のことか。
 (67) 古人潑墨成畫、縱酒作書 唐の潑墨畫家・王默(『歷代名畫記』卷一〇、『唐朝名畫錄』逸品)、狂草で知られる張旭(『舊唐書』卷一九〇中、『新唐書』卷二〇二)を念頭に置くとみられる。どちらも飲酒して揮毫することが多かった。
 (68) 成化丙申 明・憲宗の年號。丙申は十二年(一四七六)。
 (69) 李士實 字は若虛。南昌(江西省)の人。成化二年(一四六六)の進士。『無聲詩史』卷六、『佩文齋書畫譜』卷四二。

- (70) 漁陽、松雪、清河、恕齋、康里 それぞれ鮮于樞、趙孟頫、元明善、班惟志、康里巉巉を指す。いずれも前出。
 (71) 不可得而見矣 『論語』公冶長「夫子之言性與天道、不可得而聞也」。
 (72) 高山仰止 『毛詩』小雅・車鞏の句。
 (73) 悠悠我心 『毛詩』鄭風・子衿の句。
 (74) 丁酉 成化十三年(一四七七)。
 (75) 蔡仲謙 元・許有壬『至正集』に、「七賢過寒林圖爲蔡仲謙運使作」(卷二八)、「高房山青山白雲圖爲蔡仲謙運使賦」(卷二八)、「蔡仲謙運使雲林小像贊」(卷六七)がある。
 (76) 喬簣成 元時代の收藏家。字は達之、號は仲山。大都の人。吏部郎中、翰林直學士などを歴任した。
 (77) 兪庸 『江南通志』卷一四三に「兪庸、字時中、徳璘子、初爲明道書院山長、大徳中以地震陳格天心召和氣九策、丞相嘉之、補試戸部令史、桑官至尚服院都事、性倜儻、善議論、達時務、有復辨集若干卷」とある人物か。ほかに元代に同姓同名で嘉興(浙江省)の人、字は子中という人物もいる(『元詩選癸集』など)。文人としてはこちらのほうが著名だが字が異なる。
 (78) 隆裕皇太后 光緒帝の皇后・葉赫那拉氏。西太后の弟の娘。宣統帝を後見した。

備考

傳來過程について、元の馬居克跋は、郝天挺が石巖へ譲ったとし、『畫鑑』にも石巖の所藏品として記載される。明の成化十二年の張寧跋によれば當時の所有者は梁景熙(梁昉か)であった。清代には梁清標の藏するところとなり、その後、内府に入った。卷中に押される鑑藏印には未詳のものも多く、今後の解明が待たれる。なお、今回の釋讀の範圍は、參考文獻

に挙げた諸書に掲載の箇所にとどめた。箱書、題簽等の付屬資料および李士實跋以後の情報の有無に關しては今後の課題としたい。

著錄

元・湯屋『畫鑑』卷一

※明・張丑『清河書畫舫』卷六、李煜附、明・都穆『鐵網珊瑚』卷一四、明・汪砢玉『珊瑚網』卷四八、清・卞永譽『式古堂書畫彙考』卷四五
はいずれも『畫鑑』の引用。

『石渠寶笈續編』第二九、重華宮藏六（上海書店本、第五冊、一五四九
〜五一頁）。

参考文献

『東洋美術 第一卷 繪畫一』（朝日新聞社、一九六七年）

『有鄰館精華』（藤井齊成會有鄰館、一九七五年）

戸田禎佑「中國繪畫の鑑賞（十四）」（『新釋漢文大系 季報十四』、明治書院、一九七五年）

『文人畫粹編 第二卷 董源 巨然』（中央公論社、一九七七年）

大阪市立美術館編『海を渡った中國の書―エリオット・コレクションと宋元の名蹟―』（讀賣新聞社、二〇〇三年）

〔竹浪遠〕

二 駿骨圖 龔開筆

大阪市立美術館

元

外題簽「圖 2·5」

御題宋龔翠巖駿骨圖

紙本墨畫

清·高宗題詩「圖 2·6」

二九·九×五六·九

內箱蓋表「圖 2·2」

宋龔翠巖駿骨圖

內箱蓋裏「圖 2·3」

翠巖龔開、以宋遺臣守節窮居、乃作駿骨圖、豈託焉以見志耶、讀其題詩、不亦悲乎、是以雲林鐵崖諸名賢以至乾隆君臣、各題鉅製、固不以尋常畫圖視之、節義動人、竟至此乎、是卷幾經名流寶傳、吳氏大觀錄、安氏墨緣彙觀、均有箸錄、竝題曰瘦馬圖、取杜陵詩意也、曾為高江邨所寶、而銷夏錄不載、以後入內府、敬避刪去也歟、及清亡、卷亦遂踰海東來、得無非鬼神呵護以託存於我邦乎、所謂畫以人重者、是也、如區區論筆墨高妙、抑末焉耳、笙洲君獲之、以為貴於圖球、良有以哉

甲子七月、長尾甲識

「甲印」(白文方印)、「雨山」(朱文方印)「圖 2·4」

鑑藏印「圖 2·6」

「清·高宗題詩首部騎縫」「圖 2·7」

「天地為師」(朱文長方印、清·高宗)

翠岩荆楚個儻人、命蹇適丁兵燹時、晨炊夕爨屢不繼、錯莫墨突無黔期、作馬聊以供日給、法如篆籀出秦斯、逆旅荒寂乏几榻、伏兒背上粗成之、東郊瘦馬見是卷、殍殘支立骨倚皮、神氣龍騰目電發、力甚矣億意不羈、幹惟畫肉早見誚、求諸曹霸無前為、想其賦意乃自況、一寫礪礪含餘悲、有如原憲貧非病、未遇武子癖且奇、伯仲連吟誌珍重、後賢數輩留清詞、江村讀杜乃束手、而我撫卷別有思、天閑之馬多無萬、水飲芻秣圉人司、豈無詭銜竝竊轡、筋埋肉脹日以滋、如此駿者困泥滓、疇則入告何由知

乾隆戊辰春二月既望四日、御題

「漱芳潤」(白文方印)、「煙雲舒卷」(白文方印)、「乾隆宸翰」

(朱文方印)「圖 2·8」

〔清·高宗題詩首部〕〔圖2·7〕

〔天籟閣〕（朱文長方印、項元汴^(4.1)）

〔高詹事〕（白文方印、高士奇）

〔宮保世家〕（白文方印、項元汴）

〔清·高宗題詩尾部〕〔圖2·9〕

〔高氏江邨艸堂珍藏書畫之印〕（白文長方印、高士奇）

〔嘉禾李氏珍藏〕（白文方印、李肇亨^(4.2)）

〔項子京家珍藏〕（朱文長方印、項元汴）

〔項叔子〕（白文方印、項元汴）

〔清·高宗題詩尾部騎縫〕〔圖2·9〕

〔三希堂〕（朱文葫蘆印、清·高宗）

〔虛衷激照〕（朱文方印、清·高宗）

題簽

〔圖2·1、2·10〕

龔開駿骨圖

神品

〔神〕「品」（朱文連印、清·高宗）〔圖2·11〕

古香齋祕玩

〔乾隆宸翰〕（朱文方印、清·高宗）〔圖2·12〕

題記

〔圖2·1〕

駿骨圖〔圖2·13、14〕

龔開畫〔圖2·15、4·18、原色圖版2〕

〔淮陰龔開〕（白文方印）、〔學古文藝〕（白文方印）

〔圖2·13、2·16〕

項元汴千字文編號

〔圖2·16〕

逐^(4.4)

清·高宗題詩

〔圖2·1、2·17、原色圖版2〕

〔清玩〕（朱文長方印）

底須市取費千金、官字還堪六印尋、今夕賁然同照夜、風人三詠^(4.5)

寄遐心、困傍鹽車擬一鳴、肯教曹霸獨騰聲、徐家月旦驪黃外、^(4.6)

不向如來行處行^(4.7)

題長歌後十日、再閱是卷、因題

〔幾暇怡情〕（白文方印）

鑑藏印

〔圖2·1〕

〔本紙首部騎縫〕〔圖2·13〕

〔淳化軒圖書珍祕寶〕（白文方印、清·高宗）

- 「子京」〔大半缺〕（朱文方印、項元汴）
- 「三希堂精鑑璽」（朱文長方印、清·高宗）
- 「宜子孫」（白文方印、清·高宗）
- 「石渠定鑑」（朱文圓印、清·高宗）
- 「寶笈重編」（白文方印、清·高宗）
- 「〔右半缺〕 叔子」（白文方印、項元汴）
- 〔本紙首部〕〔圖 2·13〕
- 「神」「品」（朱文連印、項元汴）
- 「簡靜齋」（朱文長方印、高士奇）
- 「退密」（朱文葫蘆印、項元汴）
- 「子京父印」（朱文方印、項元汴）
- 「項子京家珍藏」（朱文長方印、項元汴）
- 「子孫世昌」（白文方印、項元汴）
- 「淳化軒」（朱文長方印、清·高宗）
- 「乾隆宸翰」（白文方印、清·高宗）
- 「信天主人」（朱文方印、清·高宗）
- 「壽」（白文長方印、清·高宗）
- 「小如庵祕笈」（朱文方印、完顏景賢^(6.9)）
- 「景長樂印」（白文方印、完顏景賢）
- 「構李李氏鶴夢軒珍藏記」（朱文方印、李肇亨）
- 「笙巢眞賞」（白文方印、曾協均^(7.9)）
- 「臥雪齋藏」（朱文方印、曾協均）
- 「乾隆御覽之寶」（朱文橢圓印、清·高宗）
- 〔本紙尾部〕〔圖 2·18、原色圖版 2〕
- 「古希天子」（朱文圓印、清·高宗）
- 「歸安陸樹聲所見金石書畫記」（白文方印、陸樹聲^(8.9)）
- 「石渠寶笈」（朱文長方印、清·高宗）
- 「高士奇圖書記」（朱文長方印、高士奇）
- 「儀周珍藏」（朱文長方印、安岐^(9.9)）
- 「寄敖」（朱文橢圓印、項元汴）
- 「子孫永保」（白文方印、項元汴）
- 「項墨林鑑賞章」（白文方印、項元汴）
- 「構李項氏士家寶玩」（朱文長方印、項元汴）
- 「竹窗」（朱文長方印、高士奇）
- 「乾隆鑑賞」（白文圓印、清·高宗）
- 「任齋銘心之品」（朱文方印、完顏景賢）
- 「李君實鑑定」（朱文長方印、李日華^(10.9)）
- 〔本紙尾部騎縫〕〔圖 2·18、原色圖版 2〕
- 「墨林子」〔左半缺〕（白文方印、項元汴）

「虛朗」〔左半缺〕（朱文方印、項元汴）

「神游」〔左半缺〕（朱文方印、項元汴）

「寓意于物」（朱文方印、清·高宗）

〔後隔水〕〔圖 2·18〕

「五福五代堂古稀天子寶」（朱文方印、清·高宗）

「八徵耄念之寶」（朱文方印、清·高宗）

「太上皇帝之寶」（朱文方印、清·高宗）

自題〔圖 2·19〕

一從雲霧降天關、空盡先朝十二閑、今日有誰憐駿骨、夕陽沙岸

影如山、經曰、馬肋貴細而多、凡馬僅十許肋、過此即駿足、

惟千里馬、多至十有五肋、假令肉中畫骨、渠能使十五肋現于

外、非瘦不可、因成此相、以表千里之異、尪劣非所諱也

淮陰龔開水木孤清書

「學古堂印」（白文方印）、「子孫世昌」（白文方印）

〔圖 2·22〕

鑑藏印〔圖 2·19〕

〔自題首部騎縫〕〔圖 2·20〕

「研露」（朱文長方印、清·高宗）

〔自題首部〕〔圖 2·20〕

「士奇」（朱文方印、高士奇）〔圖 2·21〕

「高澹人」（白文方印、高士奇）

「耗壯心遺餘年」（白文長方印、高士奇）

「墨林子」（白文長方印、項元汴）〔圖 2·20〕

「項子京家珍藏」（朱文長方印、項元汴）〔圖 2·21〕

〔自題尾部〕〔圖 2·22〕

「忠孝之家」（朱文方印、高士奇）

「景賢鑑藏」（朱文橢圓印、完顏景賢）

「退密」（朱文橢圓印、項元汴）

「子京父印」（朱文方印、項元汴）

「項墨林鑑賞章」（白文方印、項元汴）

「李君實鑑定」（朱文長方印、李日華）

「構李李氏鶴夢軒珍藏記」（朱文方印、李肇亨）

〔自題尾部·楊維禎跋首部騎縫〕〔圖 2·36〕

「三虞堂鑑藏印」（白文方印、完顏景賢）

「高氏江邨艸堂珍藏書畫之印」（白文長方印、高士奇）

楊維禎跋〔圖 2·23、2·36、2·37〕

「東維子」(朱文長方印)、「七者寮」(右少缺) (白文方印)
 誰家瘦馬鐵色驄、稜稜脊骨如懸弓、吁嗟恐是百戰後、主將棄之
 大澤中、毛色模糊雪點黑、瘡癍斑駁土花紅、天寒歲晏道里遠、
 野秣幾時秋草豐、吾聞天閑十二皆眞龍、太僕品豆蚤莫供、五花
 如雲肉如峰、生平不試汗血功、祇立閭闔生雄風、豈知驕驪在野
 食不充、生有伯樂無奇逢、嗚呼相馬貴骨不貴肉、開也畫圖無
 乃同、令我展圖三嘆心忡忡
 鐵篋叟在清眞之竹洲館、試郭圜墨
 「李黼榜第二甲進士」(朱文方印)、「廉夫」(白文方印)、「抱遺
 老人」(白文方印)

鑑藏印

〔楊維禎跋首部騎縫〕〔圖 2·36〕
 〔「右半缺(若水)」軒〕(朱文方印、項元汴)
 〔「右半缺(平生)」眞賞〕(朱文方印、項元汴)
 〔楊維禎跋尾部〕〔圖 2·37〕
 〔子京所藏〕(白文方印、項元汴)
 〔子孫永保〕(白文方印、項元汴)

倪瓚跋〔圖 2·24、2·37〕

憶昔升平貞觀年、八坊錦隊如雲煙、當時下筆寫神駿、就中最數
 韓曹賢、權奇五馬宋元祐、蘇黃賞歎稱龍眠、本朝天馬渥注種、
 指顧千里寧加鞭、飢食玉山之禾飲醴泉、龍驤虎躍何翩翩、
 翰林仙人趙榮祿、畫法直度曹李前、至今覽畫皆歎息、眞龍欲見
 無由緣、淮陰老人氣忠義、短褐雪髯當宋季、國亡身在憶南朝、
 畫思詩情無不至、宋江三十肖形模、鍾山鬼隊尤可吁、高馬小兒
 傳意匠、詩就還成瘦馬圖、夕陽沙岸如山影、天閑健步何由騁、
 後世徒知繪可珍、孰知義士憤欲瘦
 倪瓚

鑑藏印

〔倪瓚跋首部〕〔圖 2·37〕
 〔退密〕(朱文葫蘆印、項元汴)
 〔墨林山人〕(白文方印、項元汴)
 〔倪瓚跋尾部〕〔圖 2·38、39〕
 〔子孫永保〕(白文方印、項元汴)〔圖 2·38〕
 〔項墨林鑑賞章〕(白文方印、項元汴)
 〔金章世系景行維賢〕(白文長方印、完顏景賢)〔圖 2·39〕
 〔朝鮮人〕(白文長方印、安岐)
 〔安岐之印〕(白文方印、安岐)

龔璠跋「圖 2·25、2·40」

生成何用十五肋、羅帕銀鞍千百羣、可是瘖藜肥不得、骨如山立
意如雲

高郵龔璠

「龔氏子敬」(朱文方印)「圖 2·41」

鑑藏印「圖 2·25」

「龔璠跋首部騎縫」「圖 2·40」

「竹窗」(朱文長方印、高士奇)

「退密」(朱文葫蘆印、項元汴)

「小如庵祕笈」(朱文方印、完顏景賢)

「江邨祕藏」(朱文方印、高士奇)

「虛朗齋」(朱文方印、項元汴)

「龔璠跋尾部」「圖 2·41」

「墨林山人」(白文方印、項元汴)

「平生真賞」(朱文方印、項元汴)

「龔璠跋·陳深跋騎縫」「圖 2·42」

「墨林子」(白文長方印、項元汴)

「小如庵祕笈」(朱文方印、完顏景賢)

「江邨祕藏」(朱文方印、高士奇)

「虛朗齋」(朱文方印、項元汴)

「陳深跋首部」「圖 2·43」

「完顏景賢」(白文方印)

陳深跋「圖 2·25」

駿馬昔未遇、芻豆或不餽、碑兀氣自奇、何至肋可數、羸劣有若
斯、夫豈千里具、畫此匪徒作、深意蓋有寓、楚龔與蒙莊、同此
非馬喻

陳深

「陳深」(朱文方印)、「寧極齋」(白文方印)「圖 2·44」

俞焯跋「圖 2·26」

骨如山立意如雲、細肋分安十五勻、因看兩龔詩與畫、千金買骨
是何人

洛陽令俞焯

「越來子圖書印」(朱文長方印)、「山臺小隱」(朱文方印)

「圖 2·46」

鑑藏印

〔俞焯跋首部騎縫〕〔圖 2·45〕

〔寄敖〕（朱文橢圓印、項元汴）

〔小如庵祕笈〕（朱文方印、完顏景賢）

〔江邨祕藏〕（朱文方印、高士奇）

〔子孫永保〕（白文方印、項元汴）

〔俞焯跋尾部〕〔圖 2·46〕

〔墨〕〔林〕（朱文連印、項元汴）

〔宮保世家〕（白文方印、項元汴）

〔樸孫庚子以後所見〕（朱文長方印、完顏景賢）

〔安儀周家珍藏〕（朱文長方印、安岐）

楊翥跋〔圖 2·26〕

〔三讓里人〕（白文長方印）〔圖 2·47〕

自古稱良驥、以德不以力、來從渥洼水、汗血真可惜、骨相既不
凡、萬里方一息、臨陣協人心、屢戰殊無敵、于茲筋力罷、瘦骨
嗟多肋、翻鬣更垂頭、態度猶傑特、少壯既爲用、衰病那可斥、
牧向華山陽、萋萋春草碧

吳郡楊翥

〔楊氏仲舉〕（白文方印）、〔詞林備員〕（白文方印）

鑑藏印

〔楊翥跋首部〕〔圖 2·26〕

〔項墨林父祕笈之印〕（朱文長方印、項元汴）〔圖 2·48〕

〔楊翥跋尾部〕〔圖 2·26〕

〔江邨〕（朱文長方印、高士奇）〔圖 2·49〕

〔墨林山人〕（白文方印、項元汴）

〔平生真賞〕（朱文方印、項元汴）

謝晉跋〔圖 2·27〕

〔乾坤清氣〕（白文長方印）〔圖 2·50〕

何年放汝華山陽、瘦骨稜層肉竟亡、雙耳垂風寒欲墮、四蹄踏雪
暖猶僵、無人飼秣思天廐、失主哀鳴憶戰場、房琯可憐遭貶斥、
少陵曾賦病乘黃

謝晉

〔孔昭〕（朱文方印）、〔申伯世家〕（白文方印）、〔謝氏圖書〕

鑑藏印〔圖 2·27〕

〔謝晉跋首部〕〔圖 2·51〕

〔子孫世昌〕（白文方印、項元汴）

〔謝晉跋尾部〕〔圖 2·53〕

〔平生眞賞〕（朱文方印、項元汴）

〔項墨林父祕笈之印〕（朱文長方印、項元汴）

〔謝晉跋·劉益跋騎縫〕〔圖 2·53〕

〔江邨祕藏〕（朱文方印、高士奇）

〔退密〕（朱文葫蘆印、項元汴）

〔小如庵祕笈〕（朱文方印、完顏景賢）

〔項叔子〕（白文方印、項元汴）

劉益跋〔圖 2·28〕

〔東平〕（白文長方印）〔圖 2·54〕

百戰一身在、⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾ 疋羸若堵牆、⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾ 太平無事日、歸向華山陽

未食天閑粟、形骸瘦不禁、何時逢伯樂、應重價千金

吉水劉益⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

〔崇益〕（白文方印）、〔癸丑科進士之章〕（白文方印）

鑑藏印〔圖 2·28〕

〔劉益跋首部〕〔圖 2·55〕

〔虛朗齋〕（朱文方印、項元汴）

〔兩詩間〕〔圖 2·56〕

〔歸安陸樹聲所見金石書畫記〕（白文方印、陸樹聲）

徐理（徐有貞）跋〔圖 2·29〕

〔省齋〕（白文長方印）〔圖 2·58〕

題龔聖與瘦馬圖後⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾

右吳郡魏文忠所藏龔聖與瘦馬圖、聖與、名開、淮陰人、在宋季、以詩畫知名、其作此圖、蓋杜子美瘦馬行之意、聖與首自題以詩、繼而題之者、會稽楊維禎而下凡若干人、皆託之馬以喻人、其辭意有足悲者、然予觀此圖、亦竊有疑焉、古之善畫馬者、貴得其神氣、不貴得其形似、聖與乃以相馬經言、馬之千里者、其肋十有五、拘拘然如數而畫之、夫馬固有十五肋者、然不必畫也、畫之不已泥乎、予意曹霸韓幹之畫馬、不若是也、且伯樂謂、天下之馬、若滅若沒、若亡若失、不可以形容筋骨相也、可以形容筋骨相者、常馬耳、由此觀之、相馬經之言、亦未必然、如必以十五肋乃爲千里馬、亦猶必十尺乃爲文王、必三尺乃爲周公也、是世俗之見、非豪傑之見也、嗟呼、聖與旣泥形而畫之、予又泥畫而論之、豪傑之士、將不併笑之耶

正統元年中春、翰林編脩徐理題⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

〔徐氏元玉〕（白文方印）、〔辭達而已〕（白文方印）

鑑藏印「圖 2·29」

〔徐理跋首部〕「圖 2·59」

〔項子京家珍藏〕（朱文長方印、項元汴）

〔徐理跋尾部〕「圖 2·60·2」

〔景行維賢〕（白文方印、完顏景賢）

〔子孫永保〕（白文方印、項元汴）

〔宮保世家〕（白文方印、項元汴）

〔徐理跋·項元汴跋騎縫〕「圖 2·30」

〔墨林子〕（白文長方印、項元汴）「圖 2·61」

〔樹聲經眼〕（白文方印、陸樹聲）「圖 2·62」

〔江邨祕藏〕（朱文方印、高士奇）

〔神游心賞〕（朱文方印、項元汴）

項元汴跋「圖 2·30」

右龔開、字聖與、別號翠岩、淮陰人、宋兩淮制置司監當官、入朝不仕、博聞多識、耿介不同流俗、作古隸、得漢魏筆、故其書、上古典刑具在、予家藏此、遂述所由

萬曆戊寅六年孟秋七月廿又四日、在赤松軒書、墨林項元汴

〔圖 2·60·1〕

「構李」（朱文圓印）、「項元汴印」（朱文方印）、「子京父印」（朱文方印）、「項墨林鑑賞章」（白文方印）

〔圖 2·63〕

鑑藏印

〔項元汴跋首部〕「圖 2·30」

〔景〕「賢」（朱文連印、完顏景賢）「圖 2·62」

項元汴再跋「圖 2·30」

「退密」（朱文葫蘆印）「圖 2·64」、「子孫永保」（白文方印）

〔圖 2·65〕

圖繪寶鑑所載、聖與作隸書極古、善畫山水、師法二米、人馬師曹霸、描法甚麤、尤喜作墨鬼鍾馗等類、怪偉奇傑、自成一家、今觀此羸馬圖詞翰、寓形寄意、益見所蘊、諸賢品題、盡槩其義、後人什襲流傳、迄今幾三百餘年、而紙墨完整、豈非有神物護持而何、來世子孫、宜加珍重無忽七月廿又四日、復開閱是卷、重言

「項元汴印」（朱文方印）、「墨林祕玩」（朱文方印）

〔圖 2·66〕

高士奇跋「圖 2·31」

龔翠嶼、負荆楚雄俊之材、宋末父子陷元、逆旅荒寂、無几榻、每得片紙、令兒俯伏、於其背上作馬、充數日之食、生平有山中

鬼隊、出奇神變、又寫宋江三十六人、形模雄怪、皆以宕其歷落忠義之氣、去年冬、余舟過吳、得其羸馬圖、有楊鐵厓倪雲林跋、更足珍祕、春來重裝、思欲題一詩於後、逡巡落筆、思杜工部瘦馬行、誰能及之、因書卷尾、東郊瘦馬使我傷、骨骼聿兀如堵牆、絆之欲動轉欹側、此豈有意仍騰驥、細看六印帶官字、衆道三軍遺路旁、皮乾剝落作泥滓、毛暗蕭條連雪霜、去歲奔波逐餘寇、驂騮不慣不得將、士卒多騎內廐馬、惆悵恐是病乘黃、當時歷塊誤一蹶、委棄非汝能周防、見人慘憺若哀訴、失主錯莫無晶光、天寒遠放雁爲伴、日暮不收烏啄瘡、誰家且養願終惠、更試明年春草長

康熙戊寅夏六月廿七日晚涼書、江村高士奇

「士奇」(朱文方印)、「高澹人」(白文方印)、「竹窗」(朱文長方印)、「高詹事」(白文方印)「圖 2·67」

項元汴第三跋「圖 2·32、2·68」

宋龔開聖與畫羸圖詞翰、名賢題識、墨林項元汴清祕、逐字號

「子京所藏」(白文方印)、「項元汴印」(朱文方印)

鑑藏印「圖 2·32」

「項元汴第三跋下方」

「樹聲經眼」(白文方印、陸樹聲)「圖 2·69」

「項元汴第三跋·梁詩正跋騎縫」

「小如菴墨緣」(朱文方印、完顏景賢)「圖 2·69」

梁詩正跋「圖 2·33」

千金買駿半償直、朽骨幸售燕昭時、的盧顛賴孟德廐、不逢真昧無鳴期、四十萬匹木槽樣、幹也粉本陳於斯、評書瘦硬杜陵癖、其論畫馬亦以之、圖中要遣認筋骨、肯因肉勝誇妍皮、蹄高腕促氣森竦、瘦腦寧必纏金羈、是何碑兀炯然立、勁筆凌厲龔生爲、龍媒罷病士寒餓、太息如應噴嘶悲、風塵外自有真契、洗空凡俗留高奇、前身應入乘黃署、幻影還感風雲詞、君王不少渥洼產、鹽車蹭蹬縈深思、莫教絕足憫遺棄、豈惟天育慙職司、沈淪終得被恩顧、枯瘁便可迴豐滋、虞吟重發數奇歎、畫師窮老無由知臣梁詩正恭和

「臣梁詩正」(白文方印)、「補拙莫如勤」(白文長方印)

汪由敦跋「圖 2·34」

曹霸陳閔去已遠、龔生妙技突伯時、當年流落困伏櫪、惜無善聽鍾子期、那知斷楮珍拱璧、四百餘載貴若斯、緘滕流轉不終閱、溫室清晏坐致之、古香拂拂浮几榻、愛賞神駿遺毛皮、按圖豈讓照夜白、立仗肯負黃金羈、食盡石粟與致、志在萬里何能爲、杜

「圖 2·70」

陵長歌抱餘痛、昌黎雜說據深悲、卷中骨骼驚硯兀、象外精爽猶
權奇、風生電掣想逸足、天毫飛灑瓊瑀詞、鹽車久陋有如此、築
臺市駿興遐思、卽今王良耿星象、八坊十萬職有司、渥洼龍種
大宛至、泉甘沙白春草滋、龔生生恨不同世、九原吐氣喜可知
臣汪由敦恭和

「臣由敦」（朱文方印）、「惜分陰」（白文方印）「圖2・71」

沈德潛跋「圖2・35」

古人千金市駿骨、翠巖所處非其時、厓山一角海水沸、此生那有
青雲期、憑仗秃筆寫胸次、呈材天驥恆於斯、胡爲不寫豐腴寫
羸德、辱奴隸手往往鞭捶之、蘭筋銅骨眼未見、俗賞但解珍毛
皮、稜稜竝露十五肋、久虛棧豆遭鞮羈、鬱勃每從境遇出、神妙
忘却經營爲、嘗聞紙鋪兒背代几席、室無一物吁可悲、杜陵野老
賦瘦馬、兩人寄託竝是人中奇、平湖詹事有語不敢吐、氣怯力薄
難爲詞、一朝得邀聖人顧、宸藻揮灑祭神思、權奇滅沒慮卑伏、
塵外賞識關職司、南城泥滓無污辱、東郊苜蓿添華滋、披圖矧硯
發遙慨、方今渥洼龍種盡受天家知
臣沈德潛恭和

「德」「潛」（朱文白文連印）「圖2・72」

鑑藏印「圖2・35」

〔沈德潛跋尾部〕「圖2・73」
「咸熙堂鑑定」（朱文方印、完顏景賢）
「完顏景賢字亨父號樸孫一字任齋別號小如盦印」（白文方印、
完顏景賢）
「歸安陸樹聲所見金石書畫記」（白文方印、陸樹聲）

注

- （1）龔翠巖 龔開（一一二一～一三〇五）、字は聖予また聖與、翠巖と號した。淮陰（江蘇省）の人。宋の景定年間（一二六〇～六四）に兩淮制置司監當官を務めたが、元に入ってから出仕せず、遺民として過ごした。隸書を作ると古を極め、畫では山水は米芾・米友仁を師とし、畫馬は曹霸を師として神駿の意を得たという。傳は夏文彥『圖繪寶鑑』卷五、陶宗儀『書史會要』卷七、湯屋『畫鑑』、吳萊「桑海遺錄序」（『淵穎吳先生集』卷一一）、柳貫「題江磯圖卷後」（『柳待制文集』卷一八）など。
- （2）雲林鐵崖 倪瓚（後掲注120参照）と楊維禎（後掲注93参照）の號。ともに巻尾に跋を認めている。
- （3）吳氏大觀錄 吳昇（生卒年未詳）輯『大觀錄』二十卷。康熙五十二年（一七一三）序。元賢名畫卷一八に「龔翠巖瘦馬圖」を録す。
- （4）安氏墨緣彙觀 安岐（一六八三～一七四三以後）撰『墨緣彙觀』四卷。乾隆七年（一七四二）自序。名畫續録に「龔開羸馬圖卷」を録し、「圖一瘦馬」という。
- （5）杜陵詩 唐・杜甫の七言歌行「瘦馬行」。官軍に棄てられた瘦せ衰えた馬を詠う。後出御題及び高士奇跋参照。

(6) 高江邨 高士奇(一六四五〜一七〇四)字は澹人、江邨・瓶廬などと號した。平湖(浙江省)の人で錢塘(同杭州)に居した。後掲注(196)参照。

(7) 銷夏錄 高士奇撰『江村銷夏錄』三卷。康熙三十二年(一六九三)成書。

(8) 畫以人重 王士禛『香祖筆記』卷四に「予嘗謂、詩文書畫皆以人重、蘇黃遺墨流傳至今、一字兼金日」とある。

(9) 筌洲君 阿部房次郎(一八六八〜一九三七)。筌洲はその號。

(10) 甲子 大正十三年(一九二四)。

(11) 長尾甲 一八六四〜一九四二。號は兩山。

(12) 荆楚 西周から春秋戰國時代の諸候國で、今の湖北・江蘇等の地を治めた。龔開が江蘇淮陰の人であるからいう。

(13) 個儻 才能や學識などが竝外れてすぐれているさま。漢・司馬遷「報任安書」に「古者富貴而名摩滅、不可勝、惟個儻非常之人稱焉」とある。

(14) 命蹇 命運がすぐれないこと。「時乖命蹇」などともいい、運悪く時にあわなないこと。唐・楊炯「原州百泉縣令李君神道碑」に「數奇命蹇、遂無望于高門」とある。

(15) 兵燹 戰亂によりおこる火事などの災害。『宋史』神宗紀二に「丁酉、詔、岷州界經鬼章兵燹者賜錢」とある。

(16) 晨炊夕爨 朝な夕なに飯をたくこと。白居易「歲暮」詩に「晨炊原有米、夕爨厨有薪」とある。

(17) 錯莫 混亂するさま。杜甫「瘦馬行」に「見人慘澹若哀訴、失主錯莫無晶光」とある。

(18) 墨突無黔期 慌ただしい譬。孔子や墨子が奔走して席が温まったり煙突が黒くなる間がないほど、安住する暇がなかった故事による。『淮

南子』修務訓に「孔子無黔突、墨子無暖席」とあり、班固「答賓戲」賦に「聖哲之治、棲棲遑遑、孔席不暖、墨突不黔」とある。

(19) 法如篆籀出秦斯 篆籀は中國最古の字書『史籀篇』に用いられた大篆。周の宣王の太史史籀(前八〇〇頃)の作と傳承した。秦斯は秦の丞相李斯(？〜前二〇八)。小篆を作って天下の書體を統一した。

(20) 晨炊夕爨屢不繼：逆旅荒寂乏几榻、伏兒背上粗成之 この逸話に觸れる早い例として、元・吳萊(一二九七〜一三四〇)の「桑海遺錄序」(『淵穎集』卷一二)があり、「及世已改、多往來故京、家益貧、故人賓客、候問日至、立則沮洳、坐無几席、一子名浚、每俯伏榻上、就其背按紙作唐馬圖、風驟霧鬣、豪軒蘭筋、備盡諸態、一持出、人輒以數十金易得之、籍是故不飢、然竟無所求於人而死」と記す。

(21) 東郊瘦馬 杜甫「瘦馬行」の起聯「東郊瘦馬使我傷、骨體律兀如堵牆」による。

(22) 殍殘 よろめき歩くさま。唐・元稹「紀懷贈李六戸曹崔二十功曹五十韻」詩に「荒居隣鬼魅、羸馬步殍殘」とある。

(23) 龍騰 龍が飛びあがるように勢いのあること。『禮記』曲禮上に「前朱雀而後玄武、左青龍而右白虎」とあり、疏に「如鳥之翔、如蛇之毒、龍騰虎奮、無能敵此四物」という。

(24) 電發 稻妻が走るように、動きがすばやく勢いがはげしいさま。漢・劉向「九嘆」遠游に「雷動電發、馭高舉兮」とある。

(25) 幹惟畫肉早見詭 幹は唐の畫家韓幹。次條曹霸の弟子。畫馬を善くしたが、肉のみを畫いて骨を畫かないとせめられた。杜甫「丹青引贈曹將軍霸」に「弟子韓幹早入室、亦能畫馬窮殊相、幹惟畫肉不畫骨、忍使驂驪氣凋喪」とあり、『歷代名畫記』卷九・韓幹に「徒以韓馬肥大、遂有畫肉之詭」という。

(26) 曹霸 ？〜七六六猶在。魏の四代皇帝で畫を善くした曹髦の後裔にあ

たる。唐の開元の頃より畫名が上がり、天寶末には詔を奉じて御馬や功臣を畫いて、官は左武衛大將軍に至った。『宣和畫譜』には「逸驥圖」「内廐調馬圖」「羸馬圖」等が著録される。傳は張彥遠『歷代名畫記』卷九。安史の亂後は四川に流落しており、杜甫は成都で霸に會い、「丹青引贈曹將軍霸」などを作った。

(27) 況 比況。たとえる。くらべる。

(28) 礪 樹木の節が多いこと。人材が傑出、卓越する喩え。『晉書』庾敳傳に「目嶠森森如千丈松、雖礪何多節、施之大廈、有棟梁之用」とある。

(29) 原憲貧非病 魯の原憲が貧しかったが學行につとめた故事。『莊子』讓王に「子貢曰、嘻、先生何病、原憲應之曰、憲聞之、無財謂之貧、學而不能行、謂之病、今憲貧也、非病也」とある。

(30) 武子癖 武子は晉の王濟。よく馬の性を解した故事。『晉書』王濟傳に「王濟善解馬性、嘗乘一馬、著連乾鞞泥、前有水、終不肯渡、濟云、此必是惜鞞泥、使人解去、便渡、故杜預謂、濟有馬癖」とある。

(31) 伯仲連吟 畫の後に連なる題詩を指す。

(32) 後賢數輩 楊維禎・倪瓚以下の題詩の作者。

(33) 江村讀杜乃束手 江村は高士奇の號。注(3)参照。また後出の高士奇跋に、自ら詩を題そうとしたが、杜甫の「瘦馬行」を讀んでこれに及ぶものはないと考え、この詩を認めたことが識される。

(34) 天閑 天子の廐。『周禮』夏官・司馬に「天子十有二閑、馬六種」とある。

(35) 芻秣 まぐさ。牛馬の飼料。『周禮』天官・大宰に「以九式均節財用……七曰、芻秣之式」とあり、注に「芻秣、養牛馬禾穀也」という。

(36) 圉人 周代に置かれた官名。馬の飼育管理を掌る。『周禮』夏官・圉人に「圉人、掌養馬芻牧之事」とある。

(37) 詭銜竝竊轡 詭銜竊轡。「詭銜」は、馬がくつわを吐き出す。「竊轡」は、たづなを噛み切る。束縛を受けつけない譬え。『莊子』馬蹄に「夫加之以銜扼、齊之以月題、而馬知介倪闔扼驚曼、詭銜竊轡、故馬之知而態至盜者、伯樂之罪也」とある。

(38) 入告 事を上聞する。『尚書』君陳に「爾有嘉謀嘉猷、則入告爾后于内、爾乃順之于外」とある。

(39) 乾隆 愛新覺羅弘曆（一七一〇―一七九二）、清の第六代皇帝、廟號は高宗。

(40) 戊辰 乾隆十三年（一七四八）。

(41) 項元汴 一五二五―一六〇〇、字は子京、墨林・退密・香崖居士などと號した。秀水（浙江省嘉興）の人。明代後期の屈指の收藏家・賞鑑家。

(42) 李肇亨 一五九二―一六六四、字は會嘉、珂雪・醉鷗・爽溪釣士などと號した。嘉興（浙江省）の人。李日華の子。

(43) 古香齋 重華宮の東の配殿を葆中殿といい、殿額に「古香齋」と號した。

(44) 逐 千字文の三九七字目。項元汴の收藏番號。

(45) 底須市取費千金 どうして買い取るのに千金を費やす必要があるのか。千金で千里の馬を求めようとした故事をひく。『戰國策』燕策に「臣聞古之君人、有以千金求千里馬者……死馬且買之五百金、況生馬乎、天下必以王爲能市馬、馬今至矣」とある。

(46) 官字還堪六印尋 六印は唐代、官馬に印された六種の印。杜甫「瘦馬行」に「細看六印帶官字」とある。ここでは本紙に捺された乾隆璽印を杜甫詩の六印になぞらえるか。

(47) 賁然 光り輝く様子。『毛詩』小雅・白駒に「皎皎白駒、賁然來思」とある。

(48) 照夜 西域大宛から唐・玄宗に獻じられた駿馬の名。照夜白。乾隆十

一年（一七四六）の御題をもつ韓幹「照夜白圖」（メトロポリタン美術館蔵）は乾隆帝が殊に愛惜した作品として知られる。

(49) 風人三詠 風人は詩人のこと。ここでは御題に唱和する梁詩正（一六九七〜一七六三）、汪由敦（一六九二〜一七五八）、沈德潛（一六七三〜一七六九）を指す。各人については後掲の注参照。

(50) 遐心 はるかな思い。

(51) 困傍鹽車擬一鳴 鹽車牽きに服していた駿馬が、才分を伯樂に見出され、應じていないた故事をひく。『戰國策』楚策に「君亦聞驥乎。夫驥之齒至矣、服鹽車而上太行。：伯樂遭之、下車攀而哭之、解紵衣以幕之。驥於是俛而噴、仰而鳴、聲達於天、若出金石聲者、何也。彼見伯樂之知己也」とある。

(52) 徐家 徐家は『相馬書』（『說郛』卷一〇七）を撰した宋・徐咸のことか。あるいは本作に跋を付した徐理を指すかと思われる。

(53) 月旦 月旦評。ここでは馬を品評すること。『後漢書』許劭傳に「毎月輒更其品題、故汝南俗有月旦評焉」とある。

(54) 驪黃 驪は黒毛、黄は黄毛の馬のことで、馬の外面的な性質をいう。『列子』説符に「秦穆公使九方臯求馬、報曰、牝而黄。使人往取之、牡而驪。穆公不悅、伯樂喟然嘆息曰、若臯之所視、天機也。得其精而忘其粗、在其内而忘其外、乃是貴乎馬也。馬至、果天下之馬也」とある。

(55) 不向如來行處行 たとえ如來のおこないであれ、他人のまねはしない。同安察禪師「十玄談」（『景德傳燈録』卷二九）に「丈夫皆有衝天志、莫向如來行處行」とある。

(56) 完顏景賢 一八七五〜一九三一。字は亨父、號は樸孫・卯庵・小如盒など。滿洲鑲黃旗人。清末民初に北京で活躍した著名な收藏家。著録に『三虞堂書畫目』がある。

(57) 曾協均 一八三一以前〜六七以後。字は舜臣、號は笙巢、臥雪齋。室名は吟芬館。南城（江西省）の人。駢儷文の名家である曾燠（一七五九〜一八三二）の子。龔開「中山出遊圖」（フリーア・ギャラリー蔵）にも同印文の二顆がある。

(58) 陸樹聲 一五〇九〜一六〇五。本姓は林、後に陸に改める。字は與吉、號は平泉、無諍居士、九山人など。諡は文定。松江華亭（上海市）の人。嘉靖二十年（一五四一）の進士。

(59) 安岐 一六八三〜一七四三以後。字は儀周、號は麓村、松泉老人。天津の人。一説に朝鮮人であるという。鹽商で財を成し、書畫を多く收藏した。著に『墨緣彙觀』がある。注（4）参照。

(60) 李日華 一五六五〜一六三五。字は君實、號は九疑、六研齋など。嘉興秀水（浙江省）の人。萬曆二十年（一五九二）の進士。詩文、書畫に巧みで賞鑑にもすぐれた。著に『六研齋筆記』『紫桃軒雜綴』などがある。

(61) 天關 ここでは宮廷の意か。

(62) 十二閑 天子の十二の廐。注（34）参照。

(63) 經 『相馬經』をさす。但し「馬助貴細：十有五肋」の一文は現在傳わる伯樂（孫陽）『相馬經』にはみえない。

(64) 十有五肋 十五の肋骨を持つ馬は千里馬という。『齊民要術』卷六・養牛馬驢騾に「從後數其脇肋得十者良、凡馬十一者二百里、十二者千里、過十三者天馬、萬乃有一耳」とあり、割注に「一云、十三肋五百里、十五肋千里也」という。

(65) 千里之異 異は並外れて優れているようす。千里馬の異才。

(66) 疋劣 よわく劣っているようす。

(67) 水木孤清 泉水や草木の孤高で清らかなこと。また隱棲の暮らし。唐・陳子昂「感遇詩三十八首」其十三に「林居病時久、水木澹孤清。

閑臥觀物化、悠悠念無生」とある。

- (68) 七者寮 楊維禎は古劍・古琴・胡琴・管・玉帶硯・古陶甕を「六客」と稱して一室に藏し、これに自身を加えて、室號を「七客之寮」あるいは「七者寮」と名づけた。楊維禎「六客詩」(『元詩紀事』卷一六) 参照。

- (69) 鐵色驄 驄は、あしげの馬、青白混ざった毛色の馬。元好問『續夷堅志』卷三・孝順馬に「宣宗朝、一親軍卒蓄一鐵色驄、能知人指使」とある。

- (70) 稜稜 かどばって勢いあるさま。梁・武帝「與陶弘景論書啓」に「稜稜凜凜、常有生氣」とある。また、やせて骨ばったさま。南唐・李建勛「贈送致仕郎中」詩に「鶴立瘦稜稜、髭長白似銀」とある。

- (71) 懸弓 唐・許渾「漢水傷稼」詩に「西北樓開四望通、殘霞成綺月懸弓」とある。この聯については、杜甫「瘦馬行」が「東郊瘦馬使我傷、骨格硜兀如堵牆」に始まり「誰家且養願終惠、更試明年春草長」と終わるのをふまえる。

- (72) 大澤中 大澤は広大な沼地・湿地のこと。『史記』項羽本紀に「田父給曰左、左乃陷大澤中、以故漢追及之」とある。杜甫「瘦馬行」には「細看六印帶官字、衆道三軍遺路旁」とある。

- (73) 瘡癥 きずあと。『後漢書』馬廖傳に「吳王好劍客、百姓多瘡癥」とある。

- (74) 斑駁 『六研齋筆記』は「班剝」に作る。いろどりの相雜るさま。『楚辭』劉向・九歎・憂苦に「雜斑駁與鬪茸」とあり、王逸注に「斑駁、雜色也」という。また『玉篇』には「駁、馬色不純」とある。

- (75) 土花紅 『六研齋筆記』は「玉花紅」に作る。土花は、鮮苔。李賀「金銅仙人辭漢歌」に「畫欄桂樹懸秋香、三十六宮土花碧」とある。杜甫「瘦馬行」には「皮乾剝落雜泥滓、毛暗蕭條連雪霜」とある。

(76) 歲晏 歲が暮れる。杜甫に「歲晏行」がある。

- (77) 道里 道のり。『漢書』司馬相如傳下に「道里遼遠、山川阻深」とある。

- (78) 秣 まぐさ。馬の飼料にする草。『毛詩』周南・漢廣に「之子於歸、言秣其馬」とある。注(35)参照。

- (79) 眞龍 まことの龍馬。杜甫「丹青引贈曹將軍霸」に「斯須九重眞龍出、一洗萬古凡馬空」とある。

- (80) 太僕 輿馬を掌る官。『漢書』百官公卿表に「太僕、秦官、掌輿馬、有兩丞」とある。

- (81) 品豆 餌を選びすぎる意か。
- (82) 蚤莫 『六研齋筆記』は「蚤暮」に作る。朝夕の意。

- (83) 五花 珍奇な馬。唐人は駿馬のたてがみを五つに分けて剪り、五花馬と稱した。對の句とも關聯して、杜甫「高都護驄馬行」に「五花散作雲滿身、萬里方看汗流血」とあり、仇兆鰲注に「郭若虛云、五花者、剪鬃爲瓣、或三花、或五花」という。

- (84) 試 『六研齋筆記』は「識」に作る。

- (85) 立閭闔生雄風 閭闔は、天の門。『楚辭』離騷に「我令帝閭開關兮、倚閭闔而望予」とあり、注に「閭闔、天門也」という。また杜甫「丹青引」に「迴立閭闔生長風」とある。

- (86) 驊騮 駿馬の名。周の穆王の八駿の一。『玉篇』に「驊騮、駿馬、周穆王八駿之一」とある。

- (87) 生 『六研齋筆記』は「世」に作る。

- (88) 有伯樂無奇逢 伯樂は、周代の馬を見分ける名人。韓愈「雜說」に「世有伯樂、然後有千里馬、千里馬常有而伯樂不常有」とある。

- (89) 相馬 馬の相を見ること。『史記』滑稽傳に「相馬失之瘦、相士失之貧」とある。

(90) 貴骨不貴肉 杜甫「丹青引」に「弟子韓幹早入室、亦能畫馬窮殊相、幹惟畫肉不畫骨、忍使驂騮氣凋喪」とある。

(91) 無乃同 それは同じではありませんか、の意。

(92) 忡忡 心憂えるさま。『毛詩』召南・草蟲に「未見君子、憂心忡忡」とある。

(93) 鐵筵叟 楊維禎(一二九六〜一三七〇)の號。字は廉夫、號はほかに鐵崖・鐵笛道人など、晩年には老鐵・抱遺老人・東維子とも號した。會稽(浙江省)の人。泰定四年(一三二七)の進士で、地方官をつとめたが、戦亂により錢塘や松江等に移り住んだ。詩、とりわけ古樂府に優れて「鐵崖體」の稱があり、詩壇の領袖として活躍した。本跋は、李日華『六研齋筆記』卷四所收。

(94) 清真之竹洲館 竹洲館は昆山(江蘇省)の道觀清真觀の一部。楊維禎らは度々ここで雅集を催したようで、遺墨のうち「小遊仙辭序」「題張雨自書詩册」(至正二十一年花朝日、吉林省博物館藏)、(同年二月丁酉、北京・故宮博物院藏)、「晚節堂詩札」(同年三月十二日、臺北・國立故宮博物院藏)および本跋がここで揮毫されている。

(95) 試郭圮墨 『六研齋筆記』はこの四字なし。郭圮墨は當時の名墨らしく、楊維禎の款識中に散見する。虞集や吳鎮にも使用例がある。

(96) 李黼榜第二甲進士 楊維禎は、泰定四年(一三二七)丁卯科で進士を賜わった。時の狀元が李黼(一二九八〜一三五二)であった。

(97) 升平 太平の世。

(98) 貞觀 唐・太宗の治世の元號。六七二〜四九。

(99) 八坊 唐代多數の馬を飼養したところ。『新唐書』兵志一に「自貞觀至麟德四十年間、馬七十萬六千、置八坊岐・豳・涇・寧間、地廣千里」とある。

(100) 韓曹 韓幹と曹霸。いずれも畫馬の名手として知られる。注(25)・

(26) 參照。

(101) 權奇 常と異なつてすぐれていること。しばしば馬のよく行くさまを形容する。『漢書』禮樂志に「太一沉、天馬下、露赤汗、沫流赭、志倣儻、精權奇」とあり、王先謙補注に「權奇者、奇譎非常之意」という。南朝宋・顏延之「赭白馬賦」に「雄志倣儻、精權奇兮」とあり、張銑注に「權奇、善行貌」という。

(102) 五馬 五頭の馬。なお元祐年間に西域より貢獻された名馬を畫いた李公麟「五馬圖卷」(所在不明)が傳わる。

(103) 元祐 北宋哲宗の治世の元號。一〇八六〜九四。

(104) 蘇黃 蘇軾(一〇三七〜一一〇一)と黃庭堅(一一〇四〜一一〇五)。蘇軾は李公麟の畫馬を「龍眠胸中有千駟、不獨畫肉兼畫骨」(「次韻吳傳正枯木歌」)と評價し、黃庭堅は「五馬圖卷」に題記を寄せ、その畫を讚えた。

(105) 龍眠 李公麟(一〇四九〜一一〇六)。字は伯時、號は龍眠居士、舒州(安徽舒城)の人。熙寧三年(一一〇七)の進士。中書門下省刪定官となり、官は朝奉郎に至る。好古博學にして詩に長じ、畫は人物、釋道、鞍馬、山水、花鳥みな善くした。また鞍馬は韓幹にまさるとされた。鄧椿『畫繼』卷三に「士夫以爲鞍馬愈於韓幹、佛像追吳道玄、山水似李思訓、人物似韓滉、非過論也」とある。

(106) 渥洼 川の名。甘肅省安西縣境。漢・武帝のとき、この川中から神馬が得られたという。『史記』樂書に「又嘗得神馬渥洼水中」とある。

(107) 玉山之禾 玉山(崑崙山の西麓)に生えるという穀物。

(108) 醴泉 甘い泉。『爾雅』釋天に「甘雨時降、萬物以嘉、謂之醴泉」とあり、疏に「醴泉者、水泉味甘如醴也」という。また『禮記』禮運に「故天降膏露、地出醴泉」とある。

(109) 翩翩 軽やかな様子。

(110) 翰林仙人趙榮祿 趙孟頫(一一五四〜一三二二)のこと。字は子昂、號は松雪道人。宋の宗室だが元に出仕し、官は翰林學士奉旨、榮祿大夫に至った。

(111) 曹李 ここでは曹霸と李公麟を指す。

(112) 淮陰老人 龔開のこと。

(113) 短褐 みじかい麻の衣。身分の低い者が著る衣を指す。

(114) 雪髯 雪のように白いひげ。老人のひげをいう。

(115) 宋江三十 宋江は北宋末の人で三十五人の仲間とともに反亂を起こした。明代小説『水滸傳』はこの故事をモデルとする。周密(一二三二〜九八)『癸辛雜識』續集に龔開の「宋江三十六贊」が載る。また、

李日華『六研齋筆記』卷四には「龔聖與寫鍾山鬼隊出奇神變、又寫宋江三十六人形模雄怪、余幼曾見其高馬小兒圖亦出意表、蓋聖與抱歷落忠義之氣、父子陷胡觸目皆異類、特作此詼詭之技以宕胷中耳」とある。

(116) 鍾山鬼隊 鍾山は鍾馗のことか。鍾馗は中山の出身といい、そのため鍾中山とよばれる。鍾馗と鬼隊が描かれた作品として龔開「中山出遊圖」(フリーア・ギャラリー蔵)が傳わる。

(117) 高馬小兒 現在作例は傳わっていない。吳師道(一二八三〜一三四四)『吳禮部詩話』に「龔開聖予工詩、善畫馬、篆隸亦奇古、每畫題詩於後、嘗見三幅皆佳。高馬小兒圖詩云、華驄料肥九分膘、童子身長五尺饒。青絲鞚短金勒緊、春風去去人馬驍。莫作尋常廝養看、沙陀義兒皆好漢。此兒此馬俱可憐、馬方三齒兒未冠。天真爛熳好容儀、楚楚衣裝無不宜。豈比五陵年少輩、胭脂坡下逗輕肥。四海風塵雖已息、人材自少當愛惜。如此小兒如此馬、它日應須萬人敵。老夫出無驢可騎、乃有此馬騎此兒。呼兒回頭爲小駐、停鞭聽我新吟詩。兒不回頭馬行疾、老夫對之空嘖嘖」とある。

(118) 健歩 歩くのが達者なこと。

(119) 欲瘦 瘦は、こぶの意と、「瘡」に通じて言葉がでない、押し黙るといった意がある。ここでは後者か。南宋・趙師秀の「和陳水雲湖莊韻」に「獨使和者難、一夕愁欲瘦」とある。

(120) 倪瓚 一三〇〜一三四。字は元鎮、號は雲林。山水を善くし、元四大家の一人に數えられる。著作を集めた『倪雲林先生詩集』六卷、『清閨全集』十二卷には本跋はみえない。

(121) 生成 そだつ。長生する。杜甫「屏迹」詩・二に「桑麻深雨露、燕雀半生成」とある。

(122) 十五肋 注(64)参照。

(123) 羅帕銀鞍 羅帕は、うすぎぬ。きぬ。銀鞍は、銀で飾った馬の鞍。南朝梁・江淹「別賦」に「至若龍馬銀鞍、朱軒繡軸」とあり、杜甫「驄馬行」に「赤汗微生白雪毛、銀鞍却覆香羅帕」とある。

(124) 千百群 幾百幾千と群がること。極めて数多いこと。『魏書』袁翻傳に「且西北垂、即是大磧、野獸所聚、千百爲群、正是蠕蠕射獵之處」とある。

(125) 蒺藜 はまびし。蒺藜科の一年草、または多年草。中國では東北・華北や西北地方などの砂地や草地に廣く分布し、名馬を多く産する沙苑(陝西省大荔縣の渭水と洛水に挟まれた廣大な草地)は蒺藜の産地としても名高い。元・張天英「題宣和所制赤駒圖」詩に「秋深沙苑多蒺藜、夜半河南吹麝栗」と、元・成廷珪「畫馬」詩に「圉人爭喜得驊驪、撥入天閑早見收、今日有誰憐駿骨、西風沙苑蒺藜秋」とあり、杜甫「沙苑行」に「君不見左輔白沙如白水、繚以周牆百餘裡、龍媒昔是渥洼生、汗血今稱獻於此」とある。

(126) 骨如山立 宋・趙蕃「文顯和答且字韻詩再用前韻寄文顯」詩に「我今瘦骨立如山」とある。

(127) 龔璠 一二六六〜一三三一。字は子敬。曾祖炳之の時に高郵から鎮江

に遷り、のち鎮江の人となった。中奉大夫直寶謨閣司農卿渚の子。平江の和靜書院・學道書院の山長をつとめ、官は江浙儒學副提學に至った。書を善くし、『書史會要』卷七は「書有晉宋人法度」と評す。潘之淙『書法離鈎』卷七が、本跋に次いで跋する陳深と併稱して「龔璠・陳深、皆長于題跋」とあるように、龔開「中山出遊圖」(フリーア・ギャラリイ藏)や、黃庭堅「寒山子龐居士詩」(臺北・國立故宮博物院藏)、趙令穰「江郵秋曉圖」(メトロポリタン美術館藏)、王庭筠「幽竹枯槎圖」(藤井齊成會社有鄰館藏、本冊の掲載頁を参照)などに題跋が見られる。また詩文に優れ、著に『存悔齋詩』があり、この詩は陳慶年輯「續補遺」に收められる。他に龔開の圖に題した詩として「題龔巖翁龍馬圖」「龔巖翁以焦墨作亂山甚奇爲題六言」「中山夜遊圖」「題龔聖予畫馬」が録される。傳は『新元史』卷二三七、元・黃潛「江浙儒學副提學致仕龔先生墓誌銘」(『金華黃先生文集』卷三三)。

(128) 芻豆 かいまめ。牛馬の飼料。『晉書』桓溫傳に「劉景升有千斤大牛、噉芻豆十倍於常牛」とある。

(129) 碑兀 高いさま。平らかでないさま。杜甫「瘦馬行」に「東郊瘦馬使我傷、骨骼碑兀如堵牆」とある。

(130) 羸劣 瘦せ衰えること。『後漢書』東海恭王彊傳に「氣力羸劣、日夜浸困」とある。

(131) 楚龔 楚の兩龔。もとは漢代の龔勝と龔舍いう。『漢書』兩龔傳に「兩龔皆楚人也、勝字君賓、舍字君倩。二人相友、竝著名節、故世謂之楚兩龔」とある。ここでは龔開を指す。元・方回「龔侯玉豹圖」詩(『鐵網珊瑚畫品』卷二)に「龔侯之先楚兩龔、遠孫挺挺有祖風」とある。また龔開は龔璠と忘年の友となり、二人は「漢兩龔」に比せられた。明・凌迪知『古今萬世統譜』卷二に「龔璠」與龔開爲忘年友、

比漢兩龔」とある。ちなみに、龔璠は弟の理とともに學門に勵み、人は兄弟を「楚兩龔」と呼んで、漢の兩龔に比したともいう。黃潛の撰になる龔璠の墓誌銘に、「德裕内附士大夫居班行者、例遣北上、司農府君(龔璠の父渚)以列卿在遣中、行至莘縣、不食而卒、先生悲不自勝、暨成人、呼其弟理、語之曰、國亡家破、我兄弟又少孤、不能以力振起門戶、獨不可學爲儒無辱先訓乎、由是共刻意於學、日以微辭奧義自相叩擊其文字……聲譽籍甚、人稱其兄弟曰楚兩龔、以比漢之兩龔云」とある。

(132) 蒙莊 莊周を指す。宋國蒙の人。劉禹錫「傷往賦」に「彼蒙莊兮何人、予獨參嘆而長吟」とあり、柳宗元「夢歸賦」に「蒙莊之恢怪兮、寓大鵬之遠去」とある。『莊子』馬蹄の馬と伯樂の故事を踏まえる。

(133) 陳深 一二五九〜一三二九、字は子微、號は清全。吳縣の人。宋が亡ぶと門を閉ざして古學に志し、天曆中、奎章閣臣が能書によって推擧したが出仕しなかった。『書史會要』補遺は「草書步驟急就」という。また注¹²⁷で記したとおり、龔璠とともに題跋に長じたと稱される。『停雲館帖』本顔真卿「祭姪文稿」の跋などが傳わる。著に『寧極齋稿』『讀春秋編』が傳わり、『讀易編』『讀詩編』もあった。集中、龔開に和した「和龔翠巖雨中述懷韻」一首を録す。傳は『新元史』卷二三五、都穆『吳下冢墓遺文』卷二引陳植「先人墳志」。

(134) 兩龔 龔開と龔璠を指す。注¹³¹参照。

(135) 千金買骨 千里馬を得るため、まず死馬の骨を大金で求めた故事による。注⁴⁵参照。

(136) 俞焯 字は元明、號は午翁、越來子。父君登(字は泰卿)の時、三山長樂(福建省福州)より太倉(江蘇省蘇州)に遷った。泰定四年(一三二七)の進士。將仕郎、僊居縣(浙江省臺州)丞となり、至正間(一三四一〜七〇)、官は德興(江西省)尹に至った。本跋款記には

洛陽令とあるが時期は不明。著書に『詩詞餘話』一卷がある。「睢陽五老圖卷」（題跋は上海博物館藏）、朱熹「秋日告病齋居詩卷」（河南博物院藏）などに跋を附す。また朱德潤『存復齋文集』に至正九年秋閏七月望後の序を寄せており、文中に「與予交三十餘年間」とある。傳は『至正崑山郡志』卷五、『蘇州府志』（『永樂大典』卷二三八八）など。

(137) 三讓里人 吳郡の三讓郷。楊翥はその出であるらしい。『吳郡志』卷四八（范成大撰、文淵閣四庫全書）に「泰伯三讓、今吳縣有三讓郷、孔子曰泰伯其可謂至德也已矣」とある。

(138) 良驥 すぐれた馬。駿馬。『尉繚子』制談に「天下諸國助我戰、猶良驥駃耳之駛、彼駑馬鬣興角逐」、また杜甫「驄馬行」に「吾聞良驥老始成、此馬數年人更驚」とある。

(139) 以德不以力 徳によって稱賛されるのであって、力によって稱賛されるのではない。『論語』憲問第十四に「子曰、驥不稱其力、稱其徳也」とある。

(140) 渥洼水 川の名。神馬を産するという。注¹⁰⁶参照。

(141) 汗血 汗血馬。西域のフェルガナ地方に産する、血のような汗を流すという名馬。『史記』大宛傳に「多善馬、馬汗血、其先天馬子也」とある。

(142) 骨相 骨格の相。ほねぐみ。『後漢書』馬援傳に「備此數家骨相以為法」とある。

(143) 萬里方一息 萬里の距離も一息で驅ける。王維「贈李頎」詩に「文螭從赤豹、萬里方一息」とある。

(144) 罷 つかれ弱る。疲弊する。

(145) 傑特 ひとり拔きんでる。特出する。

(146) 牧向華山陽 戰馬を華山の南に放牧する。華山は陝西省華陰市にある

山で五嶽の一。『史記』留侯世家に「休馬華山之陽、示以無所爲」とある。

(147) 萋萋春草碧 草木が盛んに芽生え、新緑にいろづく。

(148) 楊翥 一三六九〜一四五三。字は仲舉、吳郡（江蘇省蘇州市）の人。はじめ孤貧であったため、兄に従って武昌（湖北省武漢市）へ遷り郷校で教えて生計を立てた。楊士奇（一三六五〜一四四四）の薦めにより經學を修め、宣宗（位一四二五〜三五）のとき吏部試に應じ、のちに翰林院檢討・修撰となった。官は左右長史などを経、景泰三年（一四五二）禮部尚書に至る。宋克「萬竹圖」（フリーア・ギャラリー蔵）に題跋が傳わる。傳は『明史』卷一五二、萬斯同『明史』卷二三三など。

(149) 房瑄 六九七〜七六三。字は次律、緱氏（河南省偃師市）の人。房融（武則天の時、正諫大夫）の子。開元十二年（七三四）、『封禪書』を獻じ校書郎に推舉される。天寶十五載（七五六）、玄宗の入蜀に隨い、吏部尚書・同平章事となる。玄宗の讓位にあたっては、肅宗のもとに使いをし、宰相に任せられ重用された。陳陶斜・青坂で安祿山軍に大敗した後、收賄を疑われ官を貶された。この時、親交のあった杜甫が房瑄を擁護し、華州へ左遷されている。傳は『舊唐書』卷一一一、『新唐書』卷一三九。

(150) 少陵 杜甫の號。

(151) 病乘黃 杜甫の「瘦馬行」に「士卒多騎內廐馬、惆悵恐是病乘黃」とある。乘黃は天馬のこと。『管子』小匡に「河出圖、雒出書、地出乘黃、今三祥未見有者」とあり、『漢書』禮樂志・郊祀歌・日出入九・應劭注に「訾黃一名乘黃、龍翼而馬身、黃帝乘之而仙」とある。

(152) 謝晉 生卒年未詳。吳（江蘇省蘇州）の人。字は孔昭、號は葵丘、蘭庭生、深翠道人。集に『蘭庭集』二卷（永樂元年、一四〇三序）があ

るが本跋は収録されていない。傳記にやや混乱があり、『無聲詩史』では「謝晉、字孔昭、善山水：又善詩」と「謝縉、號葵丘、中州人、善山水、宗趙松雪」として、「謝晉」と「謝縉」の項を分けて別人とする。一方、『明畫錄』卷三では「謝晉」のみ項があり、「字孔昭、字疊山、其蘭庭生、深翠道人、葵邱翁皆別號也、吳縣人」としている。

これについて四庫提要では『蘭庭集』中の「啓東醫學將還吳、葵丘謝縉爲寫「雲陽早行圖」并詩以贈、時永樂丁酉歲十月既望也」と題された五言詩を挙げ、「晉」と「縉」の併用があることが指摘されている。また、永樂元年の序において二百餘編とされる詩が四庫提要の時点で四五百篇を下らない事について、この「永樂丁酉（一四一七）」の詩が含まれることから、序が書かれた後に追録があつたとする。なお、これと同文の詩を伴う「雲陽早行圖」が上海博物館に所蔵されている。謝晉の生卒年については不明であるが、李日華『六研齋筆記』巻一には文徵明が謝晉の「深翠軒詩文一卷」に圖を補つたという「深翠軒圖」（正徳十三年、一五一八）が録されている。文徵明の自題によれば謝晉の詩文には俞都昌（貞木）、解學士大紳（解縉、一三六九〜一四一五）、王文靖汝玉の記文三首が次がれ、洪武己巳（二十二年、一三八九）の年記があるという。これにより謝晉の生年が元末頃と想定される。なお、この記事に該当する作例が北京故宮博物院に現存している。謝晉の作例は他に宣徳の年記を持つものが傳存していることから、おおよその活動時期を知ることができる。

(153) 疋羸 瘦せて弱っている。

(154) 堵牆 塹垣。『禮記』射義に「孔子射於矍相之圃、蓋觀者如堵牆」とある。

(155) 吉水 今の江西省吉安市吉水縣。

(156) 劉益 一四〇二〜六三。字は崇益、號は覺菴。吉水の人。翰林院檢討

であつた劉宗平の子。宣徳八年（一四三三）の進士。天順三年（一四九二）國子祭酒となる。傳は『國朝獻徵錄』卷七三など。

(157) 癸丑科進士之章 宣徳癸丑科の進士であることによる。

(158) 後 刊本「後」字なし。本跋は徐有貞『武功集』卷二所收。以下文字の校合は、文淵閣四庫全書本による。

(159) 魏文忠 未詳。

(160) 蓋 「蓋」字下「得」字あり。

(161) 若干 「若干」を「一三」に作る。本卷においては、楊維禎以下凡そ八跋。

(162) 亦竊有疑 「亦竊有疑」を「獨異」に作る。

(163) 神氣 「氣」字下「而」字あり。

(164) 得 「得」字なし。

(165) 相馬經 注(63)参照。

(166) 曹霸韓幹 注(25)・(26)参照。

(167) 伯樂謂 『列子』説符に「秦穆公謂伯樂曰、子之年長矣、子姓有可使求馬者乎、伯樂對曰、良馬可形容筋骨相也、天下之馬者、若滅若沒、若亡若失、若此者絕塵弭轍、臣之子皆下才也、可告以良馬、不可告以天下之馬也」とあり、『淮南子』道應、『太平御覽』獸部八・馬四にも同様の記述が見える。

(168) 十尺乃爲文王 『孟子』告子に「曹交問曰、人皆可以爲堯舜、有諸、孟子曰、然、交聞文王十尺、湯九尺、今交九尺四寸以長、食粟而已、如何則可」とある。また『史記』周本紀に「西伯曰文王」とあり、正義に「帝王世紀云、文王龍顏虎肩、身長十尺、胸有四乳」という。

(169) 三尺乃爲周公 三尺という句はないが、周公の身長が低かつたことについて、『荀子』非相に「蓋帝堯長、帝舜短、文王長、周公短、仲尼長、子弓短」とある。

- (170) 正統元年 一四三六年。明六代皇帝英宗の年號。
- (171) 徐理 徐有貞(一四〇七く七二)、初名は理、字は元玉。南直隸吳縣の人。宣德八年(一四三三)の進士で、翰林院編脩を授かった。英宗が重阻すると、兵部尚書・華蓋殿大學士となり、武功伯に封ぜられた。天官・地理・兵法・水利・陰陽方術の書に通じ、古文辭を能くした。著に『武功集』五卷があり、本跋は卷二に載る。書は古雅雄健と稱され、名は當時に重んじられた。行草に優れ、懷素・米芾の風を得た。遺作は尠なく、「行書竹有居歌」(上海博物館藏)等が知られる。ただ、本作は二十七歳の若書きのためか、これらと書風を異にし、顧復は「正統元年編脩時寫、與晚年書如二手」という(『平生壯觀』卷九)。傳は『明史』卷一七一、祝顥「祭武功公文」(『侗軒集』卷四)、「徐有貞傳」(『國朝獻徵錄』卷一〇)ほか。
- (172) 正統元年中春、翰林編脩徐理題 刊本この題識なし。
- (173) 辭達而已 『論語』衛靈公の句。
- (174) 制置司 地方の軍事を統括する制置使の治所。『宋史』職官志七に「制置使、不常置、掌經畫邊鄙軍旅之事」とある。
- (175) 監當官 稅務などを掌る事務官の總稱。『宋史』職官志七に「監當官 掌茶、鹽、酒稅、場務、征輸及冶鑄之事」とある。
- (176) 萬曆戊寅 萬曆六年(一五七八)。
- (177) 赤松軒 項元汴の室號。項元汴については、注(41)參照。
- (178) 圖繪寶鑑所載 夏文彥『圖繪寶鑑』卷五。校勘は元版本(中華再造善本)、津逮祕書本、借綠草堂本による。
- (179) 書 諸本「字」に作る。
- (180) 善 諸本「善」字なし。
- (181) 法 諸本「法」字なし。
- (182) 人馬 元版本、津逮祕書本「畫人馬」に、借綠草堂本「畫人物」に作る。
- (183) 甚 陸心源『穰梨館過眼錄』は「其」と録す。
- (184) 麤 借綠草堂本「麗」に作る。
- (185) 喜 借綠草堂本「喜」字なし。
- (186) 類 元版本、津逮祕書本「畫」に作り、借綠草堂本「類」字なし。
- (188) 怪偉奇傑 諸本「怪怪奇奇」に作る。
- (189) 成 諸本「出」に作る。
- (189) 荆楚 注(12)參照。
- (190) 無几榻……於其背上作馬 注(20)參照。
- (191) 宋江三十六人 注(116)參照。
- (192) 去年冬 文末の年記より康熙三十六年(一六九七)の冬とわかる。
- (193) 東郊瘦馬使我傷……更試明年春草長 杜甫「瘦馬行」全文を引く。
- (194) 作 通行本は「雜」につくる。
- (195) 康熙戊寅 康熙三十七年(一六九八)。
- (196) 高士奇 一六四五く一七〇四 字は澹人、江邨・瓶廬などと號した。平湖(浙江省)の人、錢塘(杭州)に居した。康熙帝に目をかけられ、官は禮部尚書に昇り、竹窗という號を賜った。書畫の收藏に富み、賞鑑に精しかった。なお、著作の『江邨銷夏錄』に本跋は収録されていない。この點については本作付屬の内箱蓋裏書において長尾雨山も指摘している。傳は『清史稿』卷二七一。
- (197) 半價直 梁詩正『矢音集』卷五(乾隆二十年序刊本)は「事不偶」につくる。
- (198) 燕昭 燕の昭王(？く前二七九)。千金買骨の故事は注(45)參照。
- (199) 的盧 額に白い模様のある馬で凶馬とされる。伯樂『相馬經』(『世說新語』德行・劉孝標注引)に「馬白額入口至齒者、名曰榆雁、一名的盧。奴乘客死、主棄市、凶馬也」とある。また劉備の所有した名馬

の名として知られる。

- (200) 孟德廐 孟德は曹操（一一五〜二二〇）の字。晉・傅玄「乘輿馬賦序」（『太平御覽』卷八九七・獸部九・馬五）に、「往日劉備之初降也、太祖賜之駿馬、使自至廐選之。歷名馬以百數、莫可意者。次至下廐、有的顛馬、委棄莫視、瘦悴骨立。劉備撫而取之、衆莫不笑之。馬超破蘇氏塢、塢中有駿馬百餘匹、自超以下、俱爭取肥好者。而將軍龐思獨取一騮馬、形觀既丑、衆亦笑之。其後劉備奔於荊州、馬超戰於渭南、逸足電發、追不可逮、衆乃服焉」とある。

- (201) 眞昧 目利きのことか。昧は見渡すの意。唐・劉禹錫「昏鏡詞」に「今夫來市者、必歷鑑周昧、求與己宜」とある。

- (202) 四十萬匹木槽様 廐に集められた多数の名馬。唐・玄宗の故事。木槽馬は名馬の號。『歷代名畫記』卷九・韓幹に、「玄宗好大馬、禦廐至四十萬、遂有沛艾大馬、命王毛仲爲監牧、使燕公張說作駟牧頌、天下一統、西域大宛、歲有來獻、詔於北地、置群牧、筋骨行步、久而方全、調習之能、逸異竝至、骨力追風、毛彩照地、不可名狀、號木槽馬」とある。

- (203) 幹 韓幹をさす。

- (204) 評書瘦硬杜陵癖 『矢音集』は「杜陵評書貴瘦硬」につくる。杜甫は書を論じて「李潮八分小篆歌」に「苦縣光和尙骨立、書貴瘦硬方通神」という。また畫馬に關して「丹青引贈曹將軍霸」で「弟子韓幹早入室、亦能畫馬窮殊相。幹唯畫肉不畫骨、忍使驪駒氣離喪」とし、韓幹が馬の肉を捉えるばかりで、骨を描かないことを惜しむ。

- (205) 妍皮 美しい皮。『晉書』南燕慕容超載記に「妍皮不裹癡骨、妄語耳」とある。

- (206) 蹄高挽促 蹄があつく、脚が短い。良馬の形容。『矢音集』は「挽」を「腕」につくる。『齊民要術』卷六・養牛馬驢騾に「蹄欲得厚而大、

腕欲得細而促」とある。また杜甫「高都護驄馬行」に「腕促蹄高如蹄鐵」とある。

- (207) 森竦 しげり聳える。茂って高いさま。隋・煬帝「古松詩」に「古松惟一樹、森竦詎成林」とある。

- (208) 瘦腦 瘦せた頭蓋骨。杜甫「畫馬贊」に「魚目瘦腦、龍文長身」とある。

- (209) 硯兀 注(129)参照。

- (210) 凌厲 高く飛び上がる。飛翔するさま。また勢いが強いようす。班固

- (一説に班彪)「覽海賦」に「遵霓霧之掩蕩、登雲塗以凌厲、乘虛風而體景、超太清以增勢」、また李白「答高山人兼呈權顧二侯」に「雙萍易飄轉、獨鶴思凌厲」とある。

- (211) 龔生 龔開をさす。

- (212) 龍媒 駿馬。『漢書』禮樂志に「天馬徠、龍之媒」とあり、注に「言天馬者乃神龍之類、今天馬已來、此龍必至之效也」という。また、杜甫「昔遊」詩に「有能市駿骨、莫恨少龍媒」とある。

- (213) 罷病 つかれ弱ること。『左傳』襄公八年に「寇不爲害、民不罷病、不亦可乎」とある。

- (214) 噴嘶 噴は鼻をならす。嘶はいななく。

- (215) 風塵 戦亂をいう。『漢書』終軍傳に「邊境時有風塵之警」とある。

- また俗事、俗世をいう。晋・郭璞「遊仙」詩に「高踏風塵外、長揖謝夷齊」とある。

- (216) 乘黃署 官署の名。皇室の車馬および駕馭の法を掌る。東漢では太僕寺に未央廐があり、曹魏は乘黃廐に改め、北齊と隋唐では乘黃署と稱した。

- (217) 渥注 注(106)参照。

- (218) 鹽車 驢服鹽車。千里の馬が鹽車を牽いていること。轉じて有能な才

が活かされていないこと。注(51)参照。

(219) 踏躑 險しく進み難いさま。『洛陽伽藍記』卷二・正始寺に「若乃絕嶺懸坡、踏躑蹉跎」とある。また、勢いを失うさま。木華「海賦」に

「或乃踏躑窮波」とあり、李善注に「踏躑、失勢之貌」という。

(220) 絶足 絶塵の足。千里の馬をいう。孔融「論盛孝章書」に「燕君市駿馬之骨、非欲以騁道里、乃當以招絶足也」

(221) 職司 役目、役所。『左傳』成公二年に「今叔父克遂、有功於齊、而不使命卿鎮撫王室、所使來撫余一人、而鞏伯實來、未有職司於王室、而又奸先王之禮」とあり、疏に「鞏朔、上軍大夫、非命卿、名位不達於王室」という。

(222) 沈淪 埋没する。また埋没して不遇な人材。劉向「九嘆」愍命に「或沈淪其無所達兮、或清激其無所通」とある。また李白「贈從弟南平太守之遙」詩之一に「彤庭左右呼萬歲、拜賀明主收沈淪」とある。

(223) 枯瘁 『矢音集』「瘁」を「悴」につくる。やつれる。おちぶれる。『吳志』薛綜傳に「枯瘁更榮、絶統復紀」とある。

(224) 廣吟 續けて吟ずる。「廣」は「續」の古字。つぐ。『尚書』益稷に「乃廣載歌」とあり、傳に「廣、續也」という。「廣韻」は、和韻。詩などの韻をつぐ。「廣歌」は他人に續いで詩歌を歌う。

(225) 數奇 命運が良くない。多くの事に利がない。『史記』李將軍傳に「大將軍青亦陰受上誡、以爲李廣老、數奇、母令當單于、恐不得所欲」とあり、集解に「如淳曰、數爲匈奴所敗、奇爲不偶也」という。『漢書』李廣傳は「大將軍陰受上指、以爲李廣數奇、母令當單于、恐不得所欲」とし、注に「孟康曰、奇、隻不耦也、如淳曰、數爲匈奴所敗、爲奇不耦、師古曰、言廣命隻不耦合也、孟說是矣」という。

(226) 窮老 貧困で年老いている。『漢書』游俠傳・樓護に「呂公以故舊窮老託身於我、義所當奉」とある。

(227) 梁詩正 一六九七〜一七六三。字は養仲、薊林・文濂子と號した。錢塘(浙江省杭州)の人。雍正八年(一七三〇)の探花で翰林院編修から

侍講學士に昇り、乾隆帝が即位すると南書房行走を命ぜられた。戸部・兵部・刑部・吏部の尚書を歴任し、東閣大學士を授かり、太子太

傅を加えられた。諡は文莊。書は初め柳公權を學び、繼いで趙孟頫・

文徵明を參じ、晩年は顏眞卿・李邕を師とした。『三希堂法帖』『西清

古鑑』等の編纂にあたり、著に『矢音集』がある。本詩は乾隆二十年

刊本では卷五所收。傳は『清史稿』卷三〇三、『清史列傳』卷二〇、

王昶「太子太保東閣大學士梁文莊公行狀」(『春融堂集』卷六一)など。

(228) 補拙莫如勤 拙を補うには勤しむよりほかにない。白居易「自到郡齋

題二十四韻」詩に「救煩無若靜、補拙莫如勤」とある。

(229) 陳閑 會稽の人。永王(一説に陳王)府長史となる。人物・士女を善

くし、鞍馬にも優れた。韓幹とともに曹霸に師事。なお、汪由敦『松

泉集』卷一三(文淵閣四庫全書本)は陳を「畢」に作る。

(230) 伯時 李公麟(一〇四九〜一一〇六)の字。注(105)参照。

(231) 伏櫪 馬が廐の中に飼われていること。またその馬。人が雌伏するの

に喩える。櫪は廐の床板をいう。『漢書』梅福傳に「雖有齊景之位、

伏櫪千駟、臣不貪也」、また魏・武帝「碣石篇」に「老驥伏櫪、志在

千里」とある。杜甫「高都護驄馬行」にも「雄姿未受伏櫪恩、猛氣猶

思戰場利」とみえる。

(232) 鍾子期 春秋時代、楚の人。琴の名手。伯牙の最もすぐれた理解者で

あった。『列子』湯問に「伯牙善琴、鍾子期善聽」とある。鍾子期の

死後、伯牙は琴を破断し、二度と弾かなかったという。

(233) 断楮 切れはしの紙。すなわち僅かに遺された古人の貴重な文章や作

品をいう。南宋・楊冠卿「静寄樂府序」(『客亭類稿』卷七)に「收拾

殘牋断楮於散亡棄置中、自其他詩文外、僅得樂府七十五篇」とある。

また同様の意味で、『畫繼』卷九に「大抵收藏古畫、往往不對或斷續片紙、皆可珍惜」とある。

(234) 拱璧 兩手で抱えるほどの大きな璧玉。珍貴な寶物の喩え。

(235) 緘膝 閉じて縛っておくこと。大切なものをしまい、固くとじること。

『莊子』胠篋に「唯恐緘膝肩鑄之不固也」とある。

(236) 悶 とじる。かくしてあらわさない。

(237) 溫室 温めてあるへや。暖かい部屋。漢・桓寬『鹽鐵論』取下に「衣輕暖、被美裘、處溫室」とある。一字擡頭がみられることから、ここ

では天子のいる部屋、すなわち三希堂を指すと思われる。

(238) 清晏 清く安らかなこと。

(239) 拂拂 風の動くさま。

(240) 遺毛皮 毛皮を遺(わす)る。黃庭堅「次韻子瞻和子由觀韓幹馬因論伯時畫天馬」に「曹霸弟子沙苑丞(〓韓幹)、喜作肥馬人笑之。李侯

(〓李公麟)論幹獨不爾、妙畫骨相遺毛皮。翰林(〓蘇軾)評書乃如此、賤肥貴瘦渠未知」とある。蘇軾の評とは「次韻子由書李伯時所藏韓幹馬」にみえ「幹惟畫肉不畫骨、而況失實空留皮」とある。なお端緒となった蘇轍「韓幹三馬」詩には「畫師韓幹豈知道、畫馬不獨畫馬皮。畫出三馬腹中事、似欲譏世人莫知。伯時一見笑不語、告我韓幹非畫師」とある。

(241) 照夜白 注(48)参照。

(242) 立仗 儀仗(天子の殿下で衛護する兵)を設けること。また天子の儀仗として並べる馬を立仗馬という。『新唐書』李林甫傳に「君獨不見立仗馬乎。終日無聲、而飮三品芻豆、一鳴、則斥之矣」とある。

(243) 黃金羈 黄金のおもがい。曹植「白馬篇」に「白馬飾金羈、連翩西北馳」とある。また蘇轍「韓幹三馬」に「僕夫旋作奔佚想、右手正控黃金羈」とあるのを踏まえるか。

(244) 食盡石粟 一石の粟を食べ盡くす。千里の馬が本来の力を發揮するた

めには、十分な養いが必要であること。韓愈「雜說」に「馬之千里者、一食或盡粟一石。食馬者、不知其能千里而食也。是馬也、雖有千里之能、食不飽、力不足、才美不外見」とある。

(245) 志在萬里 はるか彼方に心を馳せる。魏・武帝「碣石篇」に「老驥伏櫪、志在千里」とある。

(246) 杜陵長歌 杜甫「瘦馬行」。「東郊瘦馬使我傷」で始まる。

(247) 昌黎雜說 韓愈の「雜說四・馬說」のこと。「世有伯樂、然後有千里馬」で始まる。

(248) 據 のべる。

(249) 象外 心が形象の外に超越すること。東晉・孫綽「遊天臺山賦」に「散以象外之說、暢以無生之篇」とある。

(250) 清爽 精神。神明。『左傳』昭公二十五年に「心之清爽、是謂魂魄」とある。

(251) 權奇 注(10)参照。

(252) 風生電掣 「電掣」は、稻妻がひらめく。一瞬に過ぎゆくたとえ。南朝梁・簡文帝「金鐙賦」に「野曠塵昏、星流電掣」とある。「風馳電掣(電掣風馳)」は、疾風が吹き抜け稲妻がひらめくように迅速なさま。『六韜』龍韜・王翼に「奮威四人、主擇材力、論兵革、風馳電掣、不知所由」とある。

(253) 逸足 足がはやい。東漢・傅毅「舞賦」に「良駿逸足、踰捍凌越」とある。

(254) 天毫 『松泉集』は「毫」を「章」に作る。「天毫」ならば天子の筆蹟を、「天章」ならば天子の詩文をいう。ここでは乾隆帝の御題を指す。陳・徐陵「丹陽上庸路碑」に「御紙鳳飛、天章海溢、皆紫庭黃竹之詞」とある。

(255) 飛灑 やわらかく飛び落ちる。南朝宋・謝惠連「雪賦」に「聯翩飛灑、徘徊委積」とある。ここでは乾隆帝の揮灑する様を稱えている。

(256) 瓊琚詞 「瓊琚」は美玉をいう。『毛詩』衛風・木瓜に「投我以木瓜、報之以瓊琚」とあり、傳に「瓊、玉之美者、琚、佩玉名」といい、疏は「瓊琚、琚は玉名、則瓊非玉名、故云瓊、玉之美者、言瓊是玉之美名、非玉名也」という。また詩文作品の美稱に用いられる。韓愈「祭柳子厚文」に「玉珮瓊琚、大放厥詞」とある。

(257) 鹽車 注(51)・(218)参照。

(258) 阨 くるしむ。『孟子』公孫丑下また萬章に「遺佚而不怨、阨窮而不憫」とある。

(259) 築臺市駿 『戰國策』燕策の故事による。燕の昭王が賢者を招く方策を郭隗の問うたところ、死馬を五百金で買うことで千里の馬を手に入れた逸話を引き、續けて「今王誠欲致士、先從隗始、隗且見事、況賢於隗者乎、豈遠千里哉、於是昭王爲隗築宮而師之、樂毅自魏往、鄒衍自齊往、劇辛自趙往、士爭湊燕」とした。注(45)参照。

(260) 遐思 はるかな思い。悠遠な思索や想像。唐・李翱「幽懷賦」に「何茲世之可久兮、宜永念而遐思」とある。

(261) 王良 一名「天馬」。古代の星座の名。『晉書』天文志に「王良五星在奎北、居河中、四星曰天駟、旁一星曰王良、亦曰天馬」とある。

(262) 耿 光り輝くさま。『說文』耿に「杜林說、耿、光也」とある。

(263) 星象 星の總稱。象とは、星の明暗薄蝕の類をいう。『後漢書』律曆志に「願請太史官日月宿簿及星度課、與待詔星象考校。奏可」とある。

(264) 八坊 唐代、監牧に所屬する八箇處の馬を養うところ。『新唐書』兵志に「初、用太僕少卿張萬歲領群牧、自貞觀至麟德四十年間、馬七十萬六千、置八坊岐、豳、涇、寧間、地廣千里、一日保樂、二曰甘露、三曰南普閏、四曰北普閏、五曰岐陽、六曰太平、七曰宜祿、八曰安

定」とある。

(265) 有司 官吏。『尚書』大禹謨に「茲用不犯于有司」とあり、『周禮』夏官・諸子に「置其有司」とある。

(266) 渥洼龍種 「渥洼」は、名馬の產地。注(106)参照。また唐・翁綬「白馬」詩に「渥洼龍種雪霜同、毛骨天生膽氣雄」とある。

(267) 大宛 フェルガナ地方に存在したアリア系民族の國。漢の武帝の時、張騫の遠征によりこの地で「日に千里を行く」と言われた名馬が発見され、「汗血馬」「大宛馬」などと呼ばれた。『史記』大宛傳に「得烏孫馬好、名曰天馬、得大宛汗血馬、益壯、更名烏孫馬曰西極、名大宛馬曰天馬云」とある。

(268) 九原吐氣 「九原」は、あの世。黃泉。春秋時代、晉の卿・大夫の墓地があった地名に由來する。『禮記』檀弓下に「趙文子與叔譽觀乎九原、許乙反文子曰、死者如可作也吾誰與歸作起也、叔譽曰、其陽處父乎陽處父襄公之大傅」とある。ちなみに「臍(音キツ)」は俗に「臍」にも作り、しく、廣がる、奮い起こす、過ぎる、整える、などの意がある。「吐氣」は氣を吐き出すことだが、抑壓された志を存分に伸ばす、思うさまに氣を晴らすことをいう。李白「梁甫吟」詩に「寧羞白發照淥水、逢時吐氣思經綸」とある。また、明・文憲臣「鴛鴦牒」序に「隨學彰彰缺隱者、各下一牒、爲千古九原吐氣」とある。

(269) 汪由敦 一六九二〜一七五八。初名は良金、字は師荅、謹堂・松泉居士と號した。休寧(安徽省)の人。雍正二年(一七二四)の進士で、翰林院編修を授かり、『明史』の纂修官に任ぜられた。官は吏部尚書、協辦大學士に至った。その學は廣く、『大清一統志』や『盛京通志』の纂修に攜わった。集に『松泉集』二十六卷がある。書法は力めて晉唐の大家を追い、兼ねて篆隸に工夫であった。卒して太子太師を加えられた。諡は文端。また乾隆帝の命により、その書を摹した『時晴齋

法帖」十巻が刻された。傳は『清史稿』卷三〇二、『清史列傳』一九、錢維城「加贈太子太師吏部尚書諡文端汪由敦傳」(『碑傳集』卷二七)、錢陳群「誥封光祿大夫太子太傅吏部尚書贈太子太師諡文端汪公墓誌銘」(『香樹齋文集』卷二五)。

(270) 厓山 廣東省新會縣の南にある小島。ここにおいて祥興二年(至元十六年、一二七九)、南宋軍の殘黨が元軍に抗戦するも壞滅、ついに陸秀夫が幼帝趙昀を抱いて入水し、南宋の終焉となった。

(271) 那 隠れる意をもつ字であるが、「那」の異體字にも使われる。ここでは後者。

(272) 青雲期 官途をのぼる機會。青雲は高位高官の意。揚雄「解嘲」に「當途者升青雲、失路者委溝渠」とある。

(273) 憑仗 よる。たよる。唐・元稹「蒼溪縣寄揚州兄弟」詩に「蒼溪縣下嘉陵水、入峽穿江到海流。憑仗鯉魚將遠信、雁回時節到揚州」とある。

(274) 秃筆 ちびふで。さきのすり切れた筆。杜甫「題壁上韋偃畫馬歌」に「戲拈秃筆掃驊騮、歛見騏驎出東壁」とある。

(275) 胸次 むねのうち。胸中。

(276) 呈材天驥 才質をあらわす天下の馬。南朝宋・顏延之「赭白馬賦」に「漢道亨而天驥呈材、魏德懋而澤馬效質」とあり、呂延濟注に「漢德通遠方、天馬見」とある。

(277) 豐腴 ゆたかにこえる。

(278) 羸懣 おとろえつかれる。

(279) 辱奴隸手 眞價のわからない馬飼いに粗末に扱われる。韓愈「雜説」に「千里馬常有、而伯樂不常有。故雖有名馬、祇辱於奴隸人之手、駢死於槽枥之間、不以千里稱也」とある。

(280) 鞭捶 むちうちつ。

(281) 蘭筋 馬の筋の名。玄中(目の上のくぼみ)から出ている筋。東漢・

陳琳「爲曹洪與魏文帝書」に「整蘭筋、揮勁翮、陵厲清浮、顧盼千里」とあり、李善注に「相馬經云、一筋從玄中出、謂之蘭筋。玄中者、目上陷如井字。蘭筋豎者千里」という。

(282) 銅骨 天馬のもつ骨。たたけば銅の響く音がするという。李賀「馬詩二三首」其四に「此馬非凡馬、房星本是星、向前敲瘦骨、猶自帶銅聲」とある。房星は『晉書』天文志に「房四星、亦曰天駟、爲天馬、主車駕」という。

(283) 棧豆 馬の飼料豆。

(284) 鞮鞢 きづな。馬をつないでおく綱。

(285) 鬱勃 氣の盛んなさま。

(286) 經營 すべて規模を定め基礎をたてて物事をおさめ營むこと。ここでは畫を構想すること。謝赫『古畫品錄』に「經營位置」とあり、杜甫「丹青引贈曹將軍霸」に「詔謂將軍拂絹素、意匠慘澹經營中」とある。

(287) 神妙 人知ではかりしれない不思議な働き。

(288) 紙鋪兒背代几席 注(20)参照。

(289) 杜陵野老賦瘦馬 杜甫の「瘦馬行」をいう。杜甫は杜陵(陝西省西安)の人で、「杜陵野老」「少陵野老」などと自號した。

(290) 兩人 ここでは龔開と杜甫をさす。

(291) 平湖詹事 高士奇をさす。平湖は浙江嘉興にあった縣(現在は平湖市)。高士奇の祖籍は浙江餘姚(現在の寧波市慈溪)で、のちに錢塘(杭州)に移り、官を辭したのちは平湖に定居した。康熙三十五年(一六九七)のジュンガル親征にあたって養母を理由に同行を辭した際、詹事府詹事の職位を受けた。

(292) 有語不敢吐 ことばがあつても口にしようとはしない。高士奇が題詩の自作を避け、杜甫の「瘦馬行」を採ったことをいう。高士奇跋の「思欲題一詩」以下をさし、御題の「江村讀杜乃東手、而我撫卷別有

志」を受ける。

(293) 聖人 特別な美德をもち、人格のきわめて優れた者。古代の君主帝王や孔子などを稱えている。ここでは乾隆帝をさす。

(294) 宸藻 天子のつくる詩文。ここでは乾隆帝の御題をさす。藻は綾や美しい模様を言い、詩歌や文章を修辭的に表現する語。

(295) 揮灑 書畫をかくこと。筆をふるい、墨をそそぐ意。

(296) 神思 靈的なものに感應した心の動き。形を離れて精神の往くさま。『文心雕龍』神思に「古人云、形在江海之上、心存魏闕之上、神思之謂也」とある。また、すぐれた精神。曹植「寶刀賦」に「規圓景以定環、據神思而造像」とある。ここでは乾隆帝のすぐれた御心をいう。

(297) 權奇 注(101)参照。

(298) 滅没 馬の脚が極めて速いこと。天下の馬をいう。『列子』説符に「天下之馬者、若滅若没、若亡若失」とあり、李白「天馬歌」に「蘭筋權奇走滅没」とある。

(299) 塵外 俗世のわずらわしさを離れた處。世外。『晉書』謝安傳論に「文靖始居塵外、高謝人間」とある。

(300) 賞識 審美を見分ける。目利きをする。『宋史』歐陽脩傳に「獎引後進、如恐不及、賞識之下、率爲聞人」とある。

(301) 南城 未詳。

(302) 東郊 城市の東の外れ。杜甫「瘦馬行」の起句「東郊瘦馬使我傷」を踏まえる。

(303) 首蓓 草の名。うまごやし。『史記』大宛傳に「馬嗜首蓓、漢使取其實來」とある。

(304) 華滋 盛んにしげる。また、咲き誇る花。

(305) 砥砵 山石のごつごつとした様子。また胸中の穩やかでないこと。砥は兀に通じる。注(129)参照。

(306) 遙慨 はるかな嘆き。

(307) 天家 天下をもって家となす者の意。天子をいう。漢・蔡邕「獨斷」に「天家、百官小吏之所稱、天子無外、以天下爲家、故稱天家」とある。

(308) 沈德潛 一六七三〜一七六九。字は確士、號は歸愚、諡は文愨。江蘇長洲(蘇州)の人。若年より詩文に優れ、卓越した才を持ちながら官途に恵まれず、乾隆四年(一七三九)、六十七歳にして進士となり、

官は禮部侍郎に至った。詩は格調を重んじ、袁枚(一七一六〜九七)の性靈説と對立した。また唐宋以前の古詩を重視した。乾隆三十四年に卒すると、太子太師を追封、文愨と賜諡され、賢良祠に入れられた。

しかしながら、乾隆四十三年、徐述夔(一七〇三〜六三)の著作が筆禍に遭うと、かつて徐の傳を書いた沈德潛も不敬とみさなれ、乾隆帝の命により贈官を奪われ、祠を廢し諡を削られ、墓碑を倒されたという。編著に『説詩粹語』『古詩源』『唐宋八家文讀本』『歸愚詩文鈔』などがある。傳は『清史稿』卷三〇五。

備考

本稿は中川憲一「龔開筆「駿骨圖」」(『大阪市立美術館紀要』、一九八二年)を底本に加筆・修正をおこなった。用印者の不明であった印の特定や未収録の箱書掲載などがなかった。本圖の傳來については同書および弓野隆之「阿部コレクションの形成とその特質」(『國際シンポジウム報告書』『關西中國書畫コレクションの過去と未来』、二〇一二年三月)を参照された。

著錄

明・李日華『六研齋筆記』卷四、明・郁逢慶『書畫題跋記』卷四、清・

顧復『平生壯觀』卷九、清・吳升『大觀錄』卷一八、清・安岐『墨緣彙觀續錄』、『石渠寶笈重編』、清・陸心源『穰梨館過眼錄』卷三、清・李葆恂『無益有益齋論畫詩』卷上、阿部房次郎編『爽籟館欣賞』第一輯（博文堂、一九三〇年）、原田謹次郎編『日本現在支那名畫目錄』（大塚巧藝社、一九三八年）、『大阪市立美術館藏 中國繪畫』（朝日新聞社、一九七五年）

参考文献

- 中川憲一「龔開筆「駿骨圖」」（『大阪市立美術館紀要』、一九八二年）
『元時代の繪畫』展圖録（大和文華館、一九九八年）
板倉聖哲「龔開筆駿骨圖について」（『美のたより』一二三、大和文華館、一九九八年）
板倉聖哲「龔開筆『駿骨圖卷』（大阪市立美術館藏）について」（『月刊しにか』九（一〇）、大修館書店、一九九八年）
大阪市立美術館編『宋元の繪畫』（大阪市立美術館、二〇〇一年）
『大阪市立美術館藏・上海博物館藏 中國書畫名品圖録』（二玄社、一九九四年）
Wart, James C. Y., with Maxwell K. Hearn, Denise Parry Leidy, Zhixin Jason Sun, John Guy, Joyce Denney, Birgitta Augustin, and Nancy S. Steinhardt, *The World of Khubilai Khan: Chinese Art in the Yuan Dynasty*, Metropolitan Museum of Art, 2010.
森橋なつみ「ふたつの龔開筆」（大阪市立美術館だより『美をつくし』一八四、二〇一五年八月）

〔弓野隆之、森橋なつみ〕

三 蘭圖 鄭思肖筆

大阪市立美術館

元

紙本墨畫

二五・七×四二・四

「所南翁」（朱文方印）、「求則不得不求或與老眼空闊清風今古」（白文方印）

陳深題「圖3・6、原色圖版3」

芳草渺無尋處、夢隔湘江風雨、翁還肯作楚花、我亦為翁楚舞深¹⁰

「陳氏子微」（朱文方印）

包袱「圖3・2、原色圖版3」

鄭思肖畫蘭真跡、上等陽一¹¹

乾隆九年春日、臣張照等奉勅編次¹²

「圖3・2・1」

鑑藏印

〔首部騎縫〕「圖3・5」

〔菴「右半缺」〕（白文方印、用印者未詳）

〔乾隆鑑賞〕（白文圓印、清・高宗）

〔印文不明〕（朱文印）

〔□□鑪〕「右半缺」（朱文長方印、用印者未詳）

外題簽「圖3・4」
鄭思肖畫蘭

〔首部〕「圖3・5」

〔商丘宋犖審定真跡〕（朱文長方印、宋犖¹³）

自題「圖3・5、3・6、原色圖版3」
向來俯首問羲皇、汝是何人到此鄉、未有畫前開鼻孔、滿天浮動

古馨香

所南翁

丙午正月十五日、作此壹卷¹⁴

〔中央部〕「圖3・5」

〔嘉慶御覽之寶〕（朱文橢圓印、清・仁宗）

〔尾部〕〔圖 3·6、原色圖版 3〕

〔石渠寶笈〕（朱文長方印、清·高宗）

〔御書房鑑藏寶〕（朱文橢圓印、清·高宗）

〔三希堂精鑑璽〕（朱文長方印、清·高宗）

〔宜子孫〕（白文方印、清·高宗）

〔乾隆御覽之寶〕（朱文橢圓印、清·高宗）

〔宣統御覽之寶〕（朱文方印、清·宣統帝）

〔則之〕（白文圓印、張孝思）

〔尾部騎縫〕〔圖 3·6、原色圖版 3〕

〔□□鑪〕〔右半缺〕（朱文長方印、用印者未詳）

〔若〕〔左半缺〕（白文印、用印者未詳）

〔後隔水〕〔圖 3·6、原色圖版 3〕

〔宣統鑑賞〕（朱文方印、清·宣統帝）

〔無逸齋精鑑璽〕（朱文長方印、清·宣統帝）

王育跋〔圖 3·7〕

〔虛白道人〕（白文方印）〔圖 3·7·1〕

〔王〕（白文方印）〔圖 3·7·2〕

所南老翁磊落人、胸底飽含萬劫春、吐出必須作怪異、聚空削有

還強陳、撮山捏雲欲隱袖、爭自兩手無力空張脣、歸來垂頭默無

語、懔然促得身內神、從此縱橫踏天地、顛狂闊步誰能倫、倒拂

溪藤直畫蘭、花紫葳蕤香可餐、清風無聲煙露翠、月白凝秋半夜

寒、入夢迷人燕口醉、相逢援琴愁對嘆、老翁不見今何在、忍看

遺墨眉皺攢、人亦香兮蘭亦香、相思脈脈欲斷腸、雲開山阿見

圭璧、風散群飛聞鳳皇、長使消搖不拘束、與蘭千載共幽芳

中吳王育賦

〔彥生父〕（墨文長方印）、〔王元齋印〕（白文方印）

〔圖 3·7·3〕

烈哲跋〔圖 3·7〕

雨過春山曉、雲歸空谷香、靈均不可見、惆悵對幽芳

烈哲

〔西域〕（朱文長方印）、〔烈哲〕（朱文長方印）、〔好問〕（朱文

方印）〔圖 3·7·4〕

餘澤跋〔圖 3·8〕

南子毫端有古香、不求或與意尤長、如今好事非前輩、祇愛昌陽

掛屋梁

會游澧上過湘中、祇見葩花作小叢、近日靈均生意轉、衡從千畝

媚春風

餘澤題

「天泉」(朱文方印)「圖3·8·1」

魏俊民跋「圖3·8」

南望湘江歌楚聲、^(4,3) 癯癯鶴骨老山林、^(4,3) 濡毫為染萇弘血、^(4,3) 澹掃幽芳

寄此心

魏俊民^(4,3)

「魏氏彥章」(朱文方印)「圖3·8·2」

陳昱跋「圖3·9」

家學相承寶祐年、^(4,3) 東籬幾度菊花天、^(4,3) 紫莖綠葉留殘墨、⁽⁴⁾ 更覺秋光

分外妍⁽⁴⁾

臥龍山人陳昱^(4,4)

「吳人陳昱彥明」(朱文方印)「圖3·9·1」

鄭元祐跋「圖3·9」

南冠江上哭湘纍、⁽⁴⁾ 淚著幽蘭雨裏枝、⁽⁴⁾ 不獨萇弘血化碧、⁽⁴⁾ 孤芳愁絕

有誰知

遂昌鄭元祐^(4,4)

「一丘式壑」(白文方印)「圖3·9·2」

德欽跋「圖3·10」

君子譬如蘭在谷、所翁得之香可掬、湘江浩蕩波濤空、月落蒼梧^(4,7)

滿秋屋

屠澤釋德欽^(4,4)

「欽雪堂印」(朱文方印)「圖3·10·1」

王冕跋「圖3·10」

老子平生忠義俱、⁽⁴⁾ 棲棲山澤太清癯、⁽⁴⁾ 疎豪不作尋常醉、⁽⁴⁾ 恰侶三閭

楚大夫^(4,3)

鄭所南、胸次不凡、文章學問、有古人風度、不偶于時、遂落魄

湖海、晚年學佛、作詩作畫、每寓意焉、然其白首南冠、^(4,3) 磊磊落

落、或者有未知也

王冕^(4,3)

「王元章」(白文方印)、「會稽佳山水」(白文方印)

「圖3·10·2」

胡熙跋「圖3·10」

鄭公高蹈出風塵、⁽⁴⁾ 心蘊靈均九畹春、⁽⁴⁾ 每向毫端適幽興、⁽⁴⁾ 自然花葉

逼其真

胡熙^(4,3)

段天祐跋「圖3·11」

手種沅湘九畹春、^(4,3) 所南心事似靈均、^(4,3) 古今俛仰俱塵跡、^(4,3) 紙上幽芳

見似人

汴段天祐^(6.1)

鑑藏印

〔段天祐跋後〕〔圖 3・11〕

「張則之」(朱文方印、張孝思)〔圖 3・11・1〕

韓奕跋

〔圖 3・12、3・12・2〕

惟公生南楚、侍宦來吳中、身遭宋國亡、耿耿懷孤忠、無家又無後、南冠號北風、洒淚寫離騷、咄咄如書空、幽花閒疎葉、孤生不成叢、脩然數筆閒、遺恨自無窮、圖成綴數語、語怪誰能通、流落為世重、心苦寧論工、此花有時盡、此恨無時終、吁嗟匹夫心、所受由天衷、我思殷頑民、千古將無同

奕^(6.4)

祝允明跋

〔圖 3・12、3・12・3〕

所南不易作、作必賢士、不然寧付之方外、不肯落凡夫手、此紙先藏於衲子、今歸吾子魚、所南在地、必欣然以為得也
正德辛未祝允明記

鑑藏印

〔祝允明跋後〕〔圖 3・12〕

〔緯蕭艸堂畫記〕(朱文長方印、宋犛)〔圖 3・12・1〕

〔鬱岡居士〕(朱文方印、王肯堂^(7.6))

注

(1) 鄭思肖 一二四一〜一三一八。字は憶翁、號は所南、ほかに三外野人、一是居士など。「思肖」は宋が滅んだ後、宗室の趙(肖)氏を思うという意から改めた字。福州連江(福建省)の人。宋末に博學宏詞科に應じたが、元軍の侵攻に伴い隱棲し、蘇州に住んだ。傳は元・盧熊「鄭所南小傳」(『洪武蘇州府志』)、元・陶宗儀『輟耕錄』卷二〇、元・鄭元祐『遂昌雜錄』など。

(2) 上等陽一 本作は『石渠寶笈』初編卷三二に著録されており、「宋鄭思肖畫蘭一卷。上等陽一。素箋本。墨畫」とある。初編では上等・次等のふたつに等級をわけ、千字文(ここでは「陽」)によって排列している。

(3) 乾隆九年 一七四四年。

(4) 張照 一六九一〜一七四五。字は得天、號は涇南、天瓶居士。諡は文敏。松江婁縣(上海市)の人。康熙四十八年(一七〇九)の進士。康熙五十四年に南書房に入り、官は刑部尚書に至った。のちに罪をうけ職を解かれるも、乾隆七年(一七四二)に復官。能書で名高く、はじめ董其昌を學び、ついで顏真卿・米芾へと發展させた。『石渠寶笈』の編纂にたずさわった。著に『天瓶齋書畫題跋』二卷、『得天居士集』六卷など。傳は『清史稿』卷三〇四。

(5) 羲皇 伏羲のこと。三皇の一に數えられ、中國の創世神話にあわされ

る。ここでは蘭を羲皇に假託する。

(6) 丙午正月十五日作此壹卷 丙午は大徳十年(一三〇六)。この款記のうち「正」、「十五」の三字が手書、その外は墨摺による。明・陳繼儒『妮古録』卷二に「曾見鄭所南蘭一卷、畫左有丙戌正月十五日寫此一卷、共十一字、其月日寫此一卷皆墨印刷者、其「丙戌十五」四字則手書填之」とあり、本作とは若干異なるもの、よく似た作例が傳わっていたことがわかる。

(7) 湘江 川の名。湘水とも。長江の主要な支流の一つで洞庭湖にそそぐ。その下流に楚の屈原が身を投じた汨羅江が流れる。『史記』屈原傳に「自屈原沈汨羅後百有餘年、漢有賈生、爲長沙王太傅、過湘水、投書以弔屈原」とある。

(8) 楚花 楚の地の花。屈原の『離騷』を踏まえ、ここでは蘭を指す。

(9) 楚舞 楚の地の舞い。『史記』留侯世家に「上曰、爲我楚舞、吾爲若楚歌」とある。

(10) 深 陳深のこと。一二五九頃〜一三二九頃。字は子微。號は清全。平江(江蘇省蘇州)の人。宋が滅んだ後は門を閉ざし、著作に専念した。天暦年間に能書をもって奎章閣に推擧されるも、これを拒んだという。著は『寧極齋稿』『讀春秋編』など。傳は『新元史』卷二三五、都穆『吳下冢墓遺文』卷二引陳植「先人墳志」。

(11) □□鑪 本紙右下および左上騎縫部の印は同じものであり、二つを合わせると「□□鑪」と読める。用印者は未詳。

(12) 宋肇 一六四三〜一七一三。字は牧仲。號は漫堂、縣津山人、西陂老人等。商丘(河南省)の人。康熙三年(一六六四)黃州通判となり、江蘇巡撫などを歴任し、官は吏部尚書に至った。書畫家、收藏家としても知られる。大學士宋權の子。著に『漫堂書畫跋』一卷、『西陂類稿』五十卷など。傳は四庫全書本『江南通志』卷一一二、『清詩別裁

集』卷一三など。

(13) 張孝思 生卒年未詳。字は則之。號は嫩逸。丹徒(江蘇省鎮江)の人。書畫に通じ、萬曆から順治年間に活躍した。『昭代名人尺牘小傳』卷一に名がみえる。

(14) 『三山鄭菊山先生清雋集』(四部叢刊續編本、以下『清雋集』)「付録」所載の同文は「自」を「奈」につくる。

(15) 顛狂 氣がくるう。また、舉動の落ち著かないさま。

(16) 溪藤 紙の名。剡溪(浙江省紹興市嵊州の河流)から産する藤は紙を製するによいといわれる。蘇軾「墨妙亭詩」に「書來乞詩要自寫、爲把栗尾書溪藤」とある。

(17) 葳蕤 草木の美しいさま。

(18) 『清雋集』、「聲」を「塵」につくる。

(19) 燕□ 第二字は「女」扁であるが、文字中央に缺損があり判讀不能。『清雋集』では「如」とする。「燕」は醢(宴)に通じる。

(20) 人亦香兮蘭亦香 ひと徳が高く、蘭の花もまた芳しい。鄭思肖の徳をしのび、畫蘭を稱える。蘭は香り高いことから賢者や善人に譬えられる。『孔子家語』六本に「與善人居、如入芝蘭之室」とある。

(21) 圭璧 圭と璧。諸侯が天子にまみえるとき、また祭祀の時に執る玉。勝れた人品をこれに喩える。『毛詩』衛風・淇奥に「有斐君子、如金如錫、如圭如璧」といい、疏に「謂、武公器徳已成、練精如金錫、道業既就、琢磨如圭璧」とある。

(22) 斷腸 はなはだしい悲しみや苦しむ。

(23) 中吳 蘇州の古稱。

(24) 王育 落款より字は元齋、號は虛白道人とわかるが傳は未詳。

(25) 靈均 「離騷」の主人公の字。屈原を指す。文中に「名余曰正則兮、字余曰靈均」とある。

(26) 烈哲 傳未詳。『元詩選癸集』戊下に「烈哲、字好問、西域人」とあり、「題所南老子推蓬竹圖」一首が載る。

(27) 南子 ここでは鄭思肖を指す。

(28) 不求或與 鄭思肖の用印「求則不得、不求或與、老眼空闊、清風今古」の句よりひく。鄭思肖は蘭圖を求めない者には與え、強いて求める者には決して與えなかつたという。「精墨蘭、自更祚後、爲蘭不畫土根……不欲與、雖迫以權勢、不可得也」(元・盧熊注(1)前掲書)。

(29) 昌陽 あやめぐさ。菖蒲。香草の一種とされる。宋・吳仁傑撰『離騷草木疏』卷一・蓀荃に「香草之類、大率多異名、所謂蘭蓀卽今菖蒲是也、東坡先生石菖蒲贊引本草註云、生下濕地大根者乃是昌陽」とある。

(30) 游澧上過湘中 澧は澧水、湘は湘水を指す。ともに洞庭湖に注ぐ。

(31) 衡從 たてとよこ。ここではうねを縦横に作ることをいう。『毛詩』齊風・南山に「蓺蕪如之何、衡從其畝」とある。

(32) 餘澤 一二七七く?。字は天泉、吳江永定(江蘇省蘇州)の人。俗姓は陸。詔を奉じて杭州下竺寺の住持となり、晩年は吳の大弘教寺に住した。傳は元・顧瑛『草堂雅集』卷一四など。また高士奇『江邨銷夏錄』卷三所載の「宋李龍眠蕃王禮佛圖卷」に題跋があり、「時至正十年上章攝提格孟陬已立春六日、郡城天台老學沙門餘澤七十四歳書於寶馬寺東廡」という。

(33) 楚聲 楚の地の音楽。『漢書』禮樂志に「高祖樂楚聲、故房中樂楚聲也」とある。

(34) 鶴骨 鶴のほね。瘦軀の形容。また、仙氣のあるひとの骨相をいう。唐・孟郊「石淙」に「飄飄鶴仙骨、飛動鰲背庭」とある。

(35) 萇弘 周代の忠臣。讒言にあい、郷里の蜀で死した萇弘の血は、三年経って碧玉に化したという。『莊子』外物に「萇弘死於蜀、藏其血三年而化爲碧」とある。

(36) 魏俊民 生卒年未詳。平江縣(蘇州)の人。至正十四年(一三五四)年の進士で臺州(浙江省)臨海縣丞となる。洪武三年(一三七〇)、勅命により黃箴、劉儼、丁鳳等とともに『大明志書』を編纂した。『正德姑蘇志』卷五・科第表および『明太祖實錄』卷五九に記載がある。

(37) 家學相承寶祐年 寶祐は南宋・理宗朝の元號。一二五三〜五八。鄭思肖は寶祐二年(一二五四)に太學上舍生となり、博學宏詞科に應じた。父の鄭起(字は叔起、號は菊山)は性理學を修め、江南各地書院の山長などを務めたが、これを思肖が継いだ。

(38) 東籬 東のまがき。陶潛「飲酒」詩の「採菊東籬下、悠然見南山」による。

(39) 紫莖綠葉 紫のくきと緑の葉。蘭の生き生きとした姿を形容する。『楚辭』九歌・少司命に「秋蘭兮青青、綠葉兮紫莖」とある。

(40) 殘墨 殘された墨。ここでは鄭思肖の遺墨である畫蘭をさす。

(41) 分外 特別な。格別の。

(42) 臥龍山人陳昱 傳未詳。落款より字は彥明とわかる。明・趙琦美編『趙氏鐵網珊瑚』卷一二に著録される「鄭所南推篷竹卷」の陳昱跋に「至元二載(一三三六)仲春既望吳人陳昱題」とあり、おおよその活動期がわかる。なお『書史會要』卷六・宋の條に「陳昱」が載るが、米芾と交友があり、時代が合わないで別人。

(43) 南冠 南方楚人の冠。楚の鍾儀の故事から俘虜をいう。また、異國に囚われても故國の衣冠を忘れないたとえ。『左傳』成公九年「晉侯觀於軍府、見鐘儀、問之曰、南冠而縶者、誰也。有司對曰、鄭人所獻楚囚也」とある。

(44) 湘纍 楚の屈原の死をいう。纍は罪なくして死ぬこと。揚雄「反離騷」に「紱弔楚之湘纍」とあり、李奇注に「諸不以罪死曰纍、荀息・

仇牧皆是也。屈原赴湘死、故曰湘纍也」という。

(45) 袁弘血化碧 前掲注(35)参照。

(46) 鄭元祐 一二九二〜一三六四。字は明德。號は尚左生、遂昌山樵。遂昌(浙江省麗水)の人。至正十七年(一三五七)に平江路教授を授け、江浙儒學提舉となる。著に『遂昌雜錄』一卷、『僑吳集』十二卷などがあり、前者には鄭思肖の傳が載る。

(47) 蒼梧 舜が南巡して没した地という。『禮記』檀弓上に「舜葬於蒼梧之野」とあり、注に「舜征有苗而死、因留葬焉」という。

(48) 屠澤釋德欽 傳未詳。落款より號は欽雪堂とわかる。

(49) 清癯 やせてすらりとしていること。鶴のように瘦せ、仙人の氣質をもった容姿をいう。

(50) 三閭楚大夫 屈原を指す。「三閭大夫」は楚國の官職で、公族(昭氏、屈氏、景氏)に仕えた。かつて屈原がこの職にあった。

(51) 湖海 世間をいう。江湖。

(52) 白首南冠 白首は白髮頭の老人。南冠は前掲注(43)参照。年をとつてなお、故國に忠義を示す意。

(53) 王冕 一二八七〜一三五九。字は元章。號は梅叟、飯牛翁、會稽山農、梅花屋主など。諸暨(浙江省)の人。詩人、篆刻家、畫家として名があり、とりわけ墨梅を得意とした。著は『竹齋詩集』三卷。傳は元・夏文彦『圖繪寶鑑』卷五、『明史』卷二八五など。

(54) 高蹈出風塵 高蹈は遠くへ行くこと、風塵は俗世間の意。俗世を離れ漂泊すること。また隱居のたとえ。郭璞「遊仙詩七首」之一に「高蹈風塵外、長揖謝夷齊」とある。

(55) 九畹 畹は田の廣さを表す單位。『楚辭』離騷に「余既滋蘭之九畹兮、又樹蕙之百畝」とあり、注に「十二畝曰畹」という。

(56) 胡熙 傳未詳。

(57) 段天祐 生卒年未詳。字は吉甫。汴梁(河南省開封)の人。泰定元年(一三二四)の進士。能書であったといひ、「安和帖」(北京故宮博物院藏)が傳わる。傳は『書史會要』卷七など。

(58) 塵跡 陳跡とも。過去の事跡や事物をいう。ここでは鄭思肖の蘭圖をさす。

(59) 沅湘 沅水と湘水。ともに洞庭湖に注ぐ長江右岸の支流。かつて流瀆された屈原がこの間を放浪した。

(60) 離騷 楚の屈原の作とされる。『楚辭』に含まれる代表的な辭賦。

(61) 匹夫 一人の男。又、卑しい人。身分の低い者。

(62) 天衷 天の心。天意。

(63) 殷頑民 頑民は舊俗を慕って新しい政事を悦ばない民をいう。古代、周の統治を潔しとしなかった殷の遺民をよんだ。『尚書』畢命に「毖殷頑民、遷于洛邑」という。

(64) 奕 韓奕のこと。一三四頃〜一四〇六。字は公望。吳(蘇州)の人。著の『韓山人詩集』卷一に本跋が録される。韓奕の父・凝(一三一八〜七一、字は復陽)は醫者として高名であり、蘇州において龔璠や鄭元祐等と交友があったという(明・胡翰『胡仲子集』卷九・韓復陽墓碣)。なお、本圖を著録する『石渠寶笈』では、本跋を鄒奕(字は弘道、吳江(蘇州)の人、元末至正年間の進士。著に『吳樵稿』など)の作としている。

(65) 方外 浮世のそと。世俗を超越した世界。『莊子』大宗師に「彼游方之外者也」とある。

(66) 衲子 衲衣をつけた者の意で、とくに禪僧をいう。

(67) 吾子魚 陳鼈のことか。字は子魚。祝允明に「中表甥陳鼈子魚久抱微疾懷之得句因寄」という七言律詩がある。

(68) 正德辛未 正德六年(一五一一)。

(69) 祝允明 一四六〇〜一五二六。字は希哲、號は枝山。長洲(蘇州)の人。能書で知られ、文徵明、王寵とともに「吳中三家」と稱された。傳は『明史』卷二八六など。

(70) 王肯堂 ?〜一六三八。字は宇泰、號は損庵、念西居士など。金壇(江蘇省)の人。萬曆十七年(一五八九)の進士で官は福建參政に至った。醫學家として知られる一方、書法にも通じ、先古の名蹟をあつめた『鬱岡齋墨妙』十巻を刊行した。

備考

本作は、鄭思肖が蘇州に隱棲していた晩年六十六歳の作で、元以降しばらく蘇州周邊に傳來し、多くの賞玩を経ていたようである。宋犖所有の後、清内府に収まったが、清末に溥儀によって持ち出され、側近の劉驥業の手で大阪の博文堂に持ち込まれた。その後、阿部房次郎の藏するところとなった。

著録

明・陳繼儒『妮古錄』卷一〇、明・張丑『清河書畫舫』卷七、清・吳其貞『書畫記』卷三、清・顧復『平生壯觀』卷九、『石渠寶笈初編』卷三二、清・卞永譽『式古堂書畫彙考』卷二二、清・龐元濟『虛齋名畫續錄』卷一、阿部孝次郎編『爽籟館欣賞』第二輯(博文堂、一九三九年)、『大阪市立美術館藏 中國繪畫』(朝日新聞社、一九七五年)

参考文献

Sherman E. Lee and Wai-kam Ho, *Chinese Art Under the Mongols: The Yuan Dynasty 1279-1368*, Cleveland: Cleveland Museum of Art, 1968.

鈴木敬『中國繪畫史 中之一(南宋・遼・金)』(吉川弘文館、一九八四年)

陳福康校點『鄭思肖集』上海古籍出版社、一九九一年

鶴田武良「原田悟朗聞書 大正―昭和期における中國畫コレクションの成立」(『日中國交正常化二十周年記念 中國明清名畫展』財團法人日中友好會館、一九九二年)

楊仁愷『國寶沈浮錄 故宮散佚書畫見聞考略』(上海人民美術出版社、一九九二年)

『大阪市立美術館藏中國書畫名品展專輯(上)』(上海人民美術出版社、一九九四年)

『大阪市立美術館藏・上海博物館藏 中國書畫名品圖録』(二玄社、一九九四年)

大阪市立美術館編『宋元の繪畫』(大阪市立美術館、二〇〇一年)

『千年丹青 日本中國藏唐宋元繪畫珍品』(上海博物館、二〇一〇年)
森橋なつみ「鄭思肖「墨蘭圖」について」(『大阪市立美術館紀要』第一八号、二〇一八年三月)

〔森橋なつみ〕

四 幽篁枯木圖 郭昇筆

京都國立博物館（上野家舊藏）

元郭天錫幽篁古木

乾隆戊申、翁潭谿題〔圖4·12·1〕

光緒戊戌、湯世時書籤

「潤之心賞」（朱文方印、湯世時）

元

紙本墨畫

三三·〇×一〇六·六

外箱木口蓋〔圖4·1〕

郭天錫青雲直上圖卷

題〔圖4·4·5〕

青雲直上、宋克題

「東吳生」（白文方印）、「仲溫」（朱文方印）〔圖4·13〕

內箱蓋表〔圖4·2〕

郭天錫青雲直上圖

舊題簽〔圖4·5·4·14〕

元郭天錫幽篁古木、翁覃溪

內箱蓋裏〔圖4·3〕

圖繪寶鑑云、元郭昇、字天錫、又字祐之、號北山、京口人、畫

竹木窠石、此卷所寫幽篁古木、筆力雄豪、尤有逸氣、可知其得

意之心也、引首宋仲溫隸題、古勁蒼雅、尚無衡山以後俗態、卷

尾翁覃谿七古、妙饒神韻、可竝稱三絕矣

丁巳榴華月、長尾甲觀

「甲印」（白文方印）、「雨山」（朱文方印）〔圖4·3·1〕

款記〔圖4·6·4·16〕

郭天錫為無聞師作

「郭昇天錫」（白文方印）

題詩〔圖4·7·4·17、原色圖版7〕

槎牙摧精靈、新篁拂寒綠、葛陂與天津、此意儘可續

「最似処」？（朱文長方印）、「秉□」（朱文方印）

外題簽〔圖4·12〕

題跋〔圖4·7·11〕

「晉觀堂」(白文長方印)「圖 4·7·1」
 無聞何如絕聽子、萬籟森然何自起、北山居士偶得之、畏佳園枿
 有真理、葛陂天津云可續、槎枿鬱律交寒綠、雷雨深蟠絕壁來、
 坐臥天風響空谷、神光入定非紛紜、落月靜捲空江雲、了堂句子
 參未了、無聞道人果有聞、我昔曾探騰源跡、雪後春泥點晴碧、
 猶作吳興波榮論、翠羽華旌拓金戟、響山書屋品鶴銘、上皇羽客
 來共聽、報我髯翁三尺墨、袖有海嶽千崖青
 乾隆五十三年歲在戊申四月廿有八日、書於谷緣書屋、北平翁
 方綱⁽⁴⁾⁽⁴⁾

「翁方綱印」(白文方印)、「覃谿」(朱文方印)「圖 4·11·1」

鑑藏印

「前綾」「圖 4·5」

「西蠡經眼」(白文方印、費念慈)⁽⁴⁾⁽⁴⁾「圖 4·15」

「本紙首部」「圖 4·16」

「印文不明、右半缺」(朱文印)「圖 4·16·1(上部)」

「寄敖」(朱文橢圓印、項元汴)⁽⁴⁾⁽⁴⁾「圖 4·16·1(下部)」

「印文不明、右半缺」「圖 4·16·2(右上)」

「構李李氏鶴夢軒珍藏記」(朱文方印、李肇亨)⁽⁴⁾⁽⁴⁾

「圖 4·16·2(右下)」

「印文不明、右半缺」「圖 4·16·3(右上)」

「曾在胡夢湘處」(朱文方印、胡稷)⁽⁴⁾⁽⁴⁾「圖 4·16·3(右)」

「元汴」(朱文方印、項元汴)

「李君實鑑定」(朱文長方印、李日華)⁽⁴⁾⁽⁴⁾「圖 4·16·2(左)」

「子京珍祕」(朱文長方印、項元汴)「圖 4·16·3(左)」

「子孫永保」(白文方印、項元汴)

「項墨林鑑賞章」(白文方印、項元汴)

「本紙尾部」「圖 4·7、原色圖版 7」

「覃溪」(朱文方印、翁方綱)

「胡稷審定」(朱文方印、胡稷)「圖 4·19(右下)」

「墨林祕玩」(朱文方印、項元汴)「圖 4·19(中央)」

「項子京家珍藏」(朱文長方印、項元汴)「圖 4·19(中央下)」

「印文不明」(朱文長方印)「圖 4·18」

「合浦李氏珍藏」(朱文方印)「圖 4·19(左上)」

「子京」(朱文印、項元汴)「圖 4·19(左中央)」

「印文不明、左半缺」(朱文印)「圖 4·19(左下)」

「後綾」「圖 4·7、原色圖版 7」

「覃溪鑑藏」(朱文長方印、翁方綱)

「印文不明」(朱文方印)

注

- (1) 郭天錫 郭昇(一二八〇〜一三三五)のこと。字は天錫、退翁と號した。江蘇京口(鎮江)の人。延祐元年(一三一四)の科擧に及第せず、學官となつて文人や禪僧との交友を娛し、書家としても知られた。著作に『雲山日記』など。
- (2) 青雲直上 勢いよく青天に昇ること、轉じて速やかに官位が上がることを指す。「賈不意君能自致于青雲之上」(『史記』范雎蔡澤列傳)。
- (3) 圖繪寶鑑 元・夏文彥撰。至正二十五年(一三六五)自序。「郭昇字天錫、京口人、畫竹石窠木」(元部)。長尾跋の「又字祐之、號北山」は他所からの追記か。
- (4) 宋仲溫 宋克(一三二七〜八七)のこと。明代の書家で、宋璫、宋廣とともに三宋の一人。字は仲溫、號は南宮生。長洲(蘇州)の人。章草をよくし、小楷に優れた。畫竹でも知られた。
- (5) 衡山 文徵明(一四七〇〜一五五九)のこと。「衡山」は號。
- (6) 翁覃谿 翁方綱(一七三三〜一八一八)のこと。乾隆年間の考證學者。字は正三、忠敘。號は覃溪、蘇齋など。順天府大興縣(北京)の人。乾隆十七年(一七五二)の進士。國子監司業、内閣學士、廣東、江西、山東の各學政など。碑文、法帖の考證學的研究で知られ、書は劉墉、梁同書、王文治らと帖學派の四大家として並稱された。著作に『兩漢金石記』、『復初堂集』など。
- (7) 丁巳榴華月 大正六年(一九一七)五月のこと。「榴華」は石榴の花で、初夏に開花する。
- (8) 長尾甲 長尾雨山(一八六四〜一九四二)のこと。
- (9) 乾隆戊申 乾隆五十三年(一七八八)。
- (10) 翁潭谿 前掲注(6)。
- (11) 光緒戊戌 光緒二十四年(一八九八)。
- (12) 湯世澍 湯世澍(一八三一〜一九〇二)のこと。字は潤之、號は春雨樓主、晚號は修叟。武進(江蘇省常州)の人。湯貽汾(一七七八〜一八五三)の孫。花卉に秀でた。
- (13) 宋克 前掲注(4)。
- (14) 翁覃谿 前掲注(6)。
- (15) 無聞師 未詳。郭昇と交流のあつた禪僧か。
- (16) 槎牙 木の枝がそいだように角だつて入り組んでいるさま。
- (17) 葛陂 龍竹(龍須竹)のこと。轉じて神仙も指す。「房(費長房)憂不得到家、公(壺公)以一竹杖與之曰、但騎此得到家耳、房騎竹杖辭去、忽如睡、已到家…(中略)…所騎竹杖、棄葛陂中、視之乃青龍耳」(葛洪『神仙傳』壺公)。
- (18) 天津 箕斗の間にある天の河の中の星。天漢。隋の煬帝が洛陽(河南省)に遷都した時、洛水に架橋した橋の名でもある。河南省新蔡縣の北に西晉の末に石壘を築いた地名が葛陂であることに對應するのか。
- (19) 翁方綱『復初齋詩集』卷三五所收(「郭天錫為釋無聞畫竹木卷」)
- (20) 絶聽子 倪瓚の別號を踏まえるか。
- (21) 萬籟 風に吹かれていろいろのものが立てる音。衆籟。
- (22) 森然 樹木のこんもり茂っているさま。おごそかであるさま。
- (23) 北山居士 郭昇のこと。前掲注(1)および(3)参照。元初に王羲之の「快雪時晴帖」を所藏した郭祐之の字の「北山」と混同された。
- (24) 畏佳圈枅 高低のあるさまをいう「畏佳(わいすい)」と、青銅器の彝の注ぎ口、建造物の柱の横木である枅形のこと。「山林之畏佳、大木百圍之竅穴、似鼻、似口、似耳、似枅、似圈、似臼、似洼者、似汚者、激者、謫者、叱者、吸者、叫者、譟者、突者、咬者、前者唱于而隨者唱喁」(『莊子』齊物論)。
- (25) 深蟠絕壁來 「巫峽中宵動、滄江十月雷、龍蛇不成蟄、天地劃爭廻、

却碾空山過、深蟠絕壁來、何須妬雲雨、霹靂楚王臺」(唐・杜甫「雷」)。

(26) 紛紜 ものが入り亂れていること。

(27) 落月靜捲空江雲 『復初齋詩集』では「落月靜捲空江雲」に作る。

(28) 了堂 未詳。

(29) 無聞道人 無聞師のこと。

(30) 我昔曾探臘源跡 『復初齋詩集』では「我昔曾探臘源跡」に作る。臘源については未詳。

(31) 雪後春泥 「雪後春泥滑、籃輿款作程、山從岩罅出、雲向樹頭生、路遠勞行役、心幽愜物情、茅茨深處見、因有午雞鳴」(明・李昱「雪後山行」)。

(32) 猶作吳興波榮論 『復初齋詩集』では「猶作吳興波策論」に作る。吳興は浙江省湖州のことであり、波榮は同地出身の趙孟頫(號などで「歐波」「榮祿」という)を指すか。

(33) 華旌 旌は折いた五采の羽毛を竿首に垂らした旗。天子が士氣を鼓舞するために用いた。

(34) 金戟 金飾の戟(げき)。「張龍旗與虹旌、攢金戟與玉戚」(唐・李白「明堂賦」)。「甫也諸侯老賓客、罷酒酣歌拓金戟」(唐・杜甫「醉為馬墜諸公攜酒相看」)。

(35) 響山書屋 未詳。

(36) 鶴銘 瘞鶴銘のこと。鎮江(江蘇省)の焦山にある六朝時代の碑文。「瘞鶴」とは鶴を埋めるとの意味で、楷書體を主とし隸體をまじえ、筆者は王羲之とも梁の道士・陶弘景とも伝えられる。

(37) 上皇 天帝、上帝のこと。

(38) 羽客 羽のはえた人。仙人。道士。

(39) 髯翁 同號では明末の小説家・馮夢龍(一五七四〜一六四六)が知ら

れるが、別人。郭昇を指す。注(44)参照。
(40) 海嶽 米芾(一〇五一〜一一〇七)のこと。「海嶽」は號の「海嶽外史」による。

(41) 千崖青 山水の美をいう「萬壑爭流、千崖競秀」を踏まえる。あるいは王安石の「一路紫苔通宵窅、千崖青靄落潺湲」(「送道光法師住持靈巖」)に據るか。

(42) 乾隆五十三年歲在戊申 一七八八年。

(43) 谷緣書屋 谷園書屋のこと。翁方綱が乾隆五十一年(一七八六)に江西に赴任した際に築いた書齋。

(44) 翁方綱 前掲注(6)。
(参考)『復初齋詩集』所収の郭昇書畫跋(四則)
・題未谷所藏郭天錫墨蹟(卷一九)

「朱方髯翁畫師米、暮靄秋山枕篷底、不知髯畫觀髯書、雪擁花根煙澗茫、初春氣動人已覺、旭日光浮翠如洗、筆墨中合造化心、渾圓那執吳興體、吳興北海一機杼、王蒙張雨誰兄弟、甘泉坊僦快雪齋、蘭亭帖辨皇孫邸、方外了堂豈多觀、論交清閤窮根柢、明安乞書年莫記、笠澤蠅廬墨同泚、桂君買自長安市、示我乙春春未啓、留題挂壁又四年、鼠脂何心璞輕抵、雙鉤擬置起張閒、書派辦香迫祖禰、臘源巡吏家北山、周鼎梁銘迺迫遞、寒冬殘漏短檠光、為爾懷人幾漣涕、摩挲紙熟字起立、奕奕歎雲古迫蠹」。また、「朱方髯翁」に關して、上海博物館編『中國書畫家印鑑款識』に「朱方郭昇」(朱文方印)(元人舊跡)があり、俞希魯撰「郭天錫文集序」に「君身長八尺餘、美須髯、善論辯、通國語、倜儻略邊幅、堂堂然偉丈夫也」とあって、髯翁は郭昇を指すことがわかる。なお、前掲注(28)の「了堂」、(30)の「臘源」の語もみえる。

・郭天錫為釋無聞畫竹木卷(卷三五)
・題郭天錫日記手迹三首(卷四六)のうち第三首

「對榻無聞了即休、海門月湧大江流、盡收瘦石疎篁影、何減蘇齋接唱酬、予藏天錫為無聞上人作竹石卷、為臨寫此、記於其後」

・郭天錫書圖畫見聞志(卷六九)

- (45) 費念慈 一八五五～一九〇五。字は杞懷、號は西蠡、君直。武進(江蘇省)の人。光緒十五年(一八八九)の進士。翰林院編修を授けられるも、彈劾により野に下り、蘇州に寓居した。書に秀いで、藏書家としても知られた。著作に『歸牧集』。

- (46) 項元汴 一五二五～九〇。明代第一の大收藏家。字は子京、號は墨林、香崖居士、退密齋主人など。室號は天籟閣。浙江嘉興の人。著作に『天籟閣帖』、『墨林山堂詩集』。

- (47) 李肇亨 李日華の子。字は會嘉、號は珂雪、醉鷗、爽溪釣士。後に僧となり、法名を堂瑩とし、超果寺に住した。書に優れ、褚遂良を模した。また畫理に精しく、山水を善くし、趙左と並び稱された。著作に『寫山樓』、『率圃』、『夢餘諸草』。

- (48) 胡稷 一七六五～一八二三。乾隆五十四年(一七八九)の舉人。名は光榮、字は公望、號は夢湘という。安徽蘆江の人。胡觀瀾(一七三二～一八〇二)の子。四川川東兵備道、江西鹽法道などを歴任し、善政を敷いた。著作に『詩餘』、『鹽政利弊書』。

- (49) 李日華 一五六五～一六三五。字は君實、號は九疑、竹嬾道人。浙江嘉興の人。萬曆二十年(一五九二)の進士。著作に『六研齋筆記』、『紫桃軒雜綴』、『恬致堂集』、『味水軒日記』など。

(著録)「元郭昇字天錫、為無聞老禪、寫叢篠於古檜之根、檜橫挺一禿幹、千力萬氣、如夜叉臂、奇作也」(『六研齋筆記』卷二)。

- (50) 合浦李氏 合浦は現在の廣西チワン族自治區北海市のあたりの地名。李氏については未詳。

著録

李日華『六研齋筆記』卷二、翁方綱『復初齋詩集』卷三五

参考文献

- 東京國立博物館監修『宋元の繪畫』(便利堂、一九六二年)
宗典「辨郭昇非郭祐之及其偽畫」(『文物』一九六五年第八期)
『上野有竹齋蒐集中國書畫圖錄』(京都國立博物館、一九六六年)
『東洋美術』第一卷(繪畫I)(朝日新聞社、一九六七年)
Sherman E. Lee and Wai-kam Ho, *Chinese Art Under the Mongols: The Yuan Dynasty 1279-1368*, Cleveland: Cleveland Museum of Art, 1968.
翁同文「郭昇非郭祐之考」(『書目季刊』第五卷第四期、一九七一年)
『原色日本の美術』第二九卷(請來美術(繪畫・書))(小學館、一九七一年)
『宋元の美術』展圖録(大阪市立美術館、一九七八年)
『宋元中國繪畫展』圖録(本間美術館、一九七九年)
大阪市立美術館編『宋元の美術』(平凡社、一九八〇年)
『京都國立博物館所藏五十選』展圖録(林原美術館、一九八八年)
『元時代の繪畫』展圖録(大和文華館、一九九八年)
『國寶との出会い』展圖録(新潟縣近代美術館、二〇〇八年)
『千年丹青』展圖録(上海博物館、二〇一〇年)
『筆墨精神』展圖録(京都國立博物館、二〇一一年)
吳孟晉「郭昇筆 幽篁枯木圖」(『國華』一四〇四號、二〇一二年)
『元畫全集』第四卷第二冊(浙江大學出版社、二〇一三年)

[吳孟晉]

五 竹雀圖 王淵筆

大阪市立美術館

元

出品札「圖5・7」

日華古今繪畫展覽會出品四〇號

紙本墨畫

一三九・三×四九・九

元 王若水 竹雀軸 阿部房次郎君藏^⑤

外箱蓋表「圖5・2」

王若水畫竹雀圖^{①②}

款記「圖5・8」

王淵若水摹黃筌竹雀圖^⑥

內箱蓋表「圖5・3、5・3・1」

王若水畫竹雀圖「長尾甲印」「漢磚齋」^③

題詩「圖5・9」

露卉煙筠有態、山禽秋蝶無名、前人圖畫一做、大塊文章自成

己卯春御題^⑦

「乾隆宸翰」（朱文方印）

箱書（外箱蓋表）指示書「圖5・4」^④

箱ノ天 外箱朱書 王若水畫竹雀圖

鑑藏印

〔本紙右上〕「圖5・10」

箱書（內箱蓋表・上部）指示書「圖5・5、5・5・1」

箱の天より一寸二分 王若水畫竹雀圖

「嘉慶御覽之寶」（朱文方印、清・仁宗）^⑧

「石渠寶笈」（朱文長方印、清・高宗）

「寶笈三編」（朱文方印、清・仁宗）

「乾隆御覽之寶」（朱文橢圓印、清・高宗）

「淳化軒」（朱文長方印、清・高宗）

「乾隆宸翰」（白文方印、清・高宗）

箱書（內箱蓋表・下部）指示書「圖5・6」

「長尾甲印」（白文方印）、「漢磚齋」（朱文方印）

下邊三寸三分 箱の地

「信天主人」(朱文方印、清・高宗)

〔本紙右中〕「圖 5・11」

「蒼巖」(朱文方印、梁清標⁹⁾)

「蕉林居士」(白文方印、梁清標)

〔本紙右下〕「圖 5・12」

「安儀周家珍藏」(朱文長方印、安岐¹⁰⁾)

「別部司馬」(白文方印、用印者未詳)

〔本紙左上〕「圖 5・13、原色圖版 8」

「淳化軒圖書珍祕寶」(白文方印、清・高宗)

「心賞」(朱文瓢印、安岐)

「乾隆鑑賞」(白文圓印、清・高宗)

「嘉慶鑑賞」(朱文長方印、清・仁宗)

「三希堂精鑑璽」(朱文長方印、清・高宗)

「宜子孫」(白文方印、清・高宗)

〔本紙左下〕「圖 5・14」

「吳瑩之」(朱文方印、用印者未詳)

「濮陽吳氏章」(白文方印、用印者未詳)

注

(1) 王若水 王淵、字若水、號澹軒。錢塘(浙江省杭州)の人。趙孟頫(一二五四〜一三二二)の門下で、花鳥は五代・黃筌を、山水は北宋・郭熙を、人物は唐人に倣ったといい、北宋以前の古典を重視した畫家として知られる。

(2) 朱漆書。

(3) 金蒔繪書。

(4) 箱書指示書はいずれも長尾雨山(一八六四〜一九四二)筆。名甲、號雨山、石隱など。室名に无悶室、漢磚齋など。

(5) 阿部房次郎 一八六八〜一九三七。號笙洲。實業家・政治家として活躍する傍ら、東洋美術の蒐集に努める。昭和五年(一九三〇)、所藏の名品七十件を選び、『爽籟館欣賞 第一輯』を刊行。

(6) 黃筌は字要叔、成都(四川省)の人で、五代十國時代の蜀の畫家。花鳥を得意とした。鈎勒填彩による繊細華麗な花鳥畫風は「黃氏體」と呼ばれ、後の規範となった。『宣和畫譜』卷一六は黃筌作品を三百四十九幅收めるが、中には、「雛雀箏竹」、「柘竹雀蝶」、「引雛雀竹」、「竹雀」三幅など、本圖に關係深い主題が見られる。

(7) 清・高宗(位一七三五〜九五)による。諱弘曆、元號乾隆。己卯は乾隆二十四年(一七五九)。高宗は書畫蒐集にも積極的で、所藏の古畫について、乾隆九年に『祕殿珠林』、十年に『石渠寶笈』、五十八年に同續編を編纂した。

(8) 清・仁宗 位一七九六〜一八二〇。諱永琰、顓琰、元號嘉慶。嘉慶二十年(一八一五)に『石渠寶笈三編』編纂。

(9) 梁清標 一六二〇〜九一。字玉立、蒼巖、號蕉林など。河北省正定の人。明末清初の收藏家。

(10) 安岐 一六八三〜?。字儀周、號麓村、松泉老人。天津あるいは一説

に朝鮮の人。清代初期を代表する收藏家で、著に『墨縁彙觀』（一七四三年）がある。

(11) 『大阪市立美術館藏 中國繪畫』（朝日新聞社、一九七五年）の讀みに従う。『石渠寶笈三編』は「濮陽吳氏印」と讀む。

備考

梁清標、安岐の藏を經、乾隆二十四年（一七五九）以前に清の内府に入り、『石渠寶笈三編』（一八一五年）に著録された。梁清標以前の傳來については、安岐『墨縁彙觀』も言及する「吳瑩之」、「濮陽吳氏章」、「別部司馬」各印が手がかりになりうるが、用印者は不明である。なお、文嘉『鈴山堂書畫記』は嚴嵩の籍沒品として「王若水 竹雀圖一」とのみ記すが、これが本圖に該當するかは不明。崇彝『選舉齋書畫寓目筆記』（一九二一年）によれば、後に内府から流出し、宗室の學者・政治家である盛昱（一八五〇～一九〇〇、一八七七年進士）鬱華閣に收藏された。崇彝は宣統三年（一九一一）夏にこれを見たが、後日日本に渡ったことを聞いたと記す。

著録

安岐『墨縁彙觀』卷三、『石渠寶笈三編』延春閣、崇彝『選舉齋書畫寓目筆記』（『歷代書畫錄續編』第一二冊）卷下、阿部房次郎編『爽籟館欣賞 第一輯』（大阪・博文堂、一九三〇年）、『宋元明清名畫大觀』上（東京・大塚巧藝社、一九三一年）、原田謹次郎編『支那名畫寶鑑』（東京・大塚巧藝社、一九三六年）

参考文献

『大阪市立美術館藏 中國繪畫』（朝日新聞社、一九七五年）

〔植松瑞希〕

六 草蟲圖 江濟川款

重要文化財

京都國立博物館

元

二幅 絹本着色

各九七・二×四〇・八

款記（芍藥幅）「圖6・1、原色圖版9」

江濟川筆^①

「毘陵」^②（朱文方印）

「□氏□川」（朱文方印）

舊箱木口貼紙「圖6・3」

元畫、紅濟川筆、花蝶ノ畫、國華

（貼紙）第 號 古香庵藏^③

注

（1）江濟川 未詳。筆者を示すための後入れ落款である。類例として「紅白川」筆と傳える草蟲圖があり、群馬縣立近代美術館本などいくつか知られている。

（2）毘陵 江蘇省常州の古稱。草蟲圖の産地として知られる。

（3）古香庵 細見良（一九〇一〜一九七九）の號。兵庫縣濱坂町生。大阪・泉大津を據點に毛織物業で成功を収めた。細見家の美術コレクションは

平成十年（一九九八）に京都・岡崎の地に開館した細見美術館に引き継がれている。

備考

平成八年（一九九六）、文化廳より管理換え。

参考文献

島田修二郎「草蟲圖」（『國華』七一七號、一九五一年）

『中國の花鳥畫と日本』（花鳥畫の世界一〇）（學習研究社、一九八三年）

西上實「食蚊蝙蝠：關於京都國立博物館所藏《草蟲圖》中所見蚊市之表現」（『千年遺珍國際學術研討會論文集』、上海書畫出版社、二〇〇六年）

『名品とともに楽しむ表装の美』展圖錄（岡山縣立美術館、二〇〇八年）

『國寶との出会い』展圖錄（新潟縣立近代美術館、二〇〇八年）

『千年丹青』展圖錄（上海博物館、二〇一〇年）

『元畫全集』第四卷第二冊（浙江大學出版社、二〇一三年）

〔吳孟晉〕

七 明皇避暑宮圖 郭忠恕款

大阪市立美術館

元

絹本墨畫

一六一・五×一〇五・六

箱蓋表「圖7・2」

宋郭恕先明皇避暑宮圖^①

箱蓋裏「圖7・3、7・3・4」

畫宮室、雖一點一筆必求繩矩、最難為工、故自唐以前名家絕少、至宋初郭忠恕所作稱古今絕藝、此幀用雙幅絹寫明皇避暑宮圖、樓閣殿廡、千椽萬桷、鉤心鬪角、簷牙廊腰、高低曲折、纖毫點綴、不遺餘力、宮後山巒樹石、蒼蒨深竇、煙霏嵐動、備極精密、而筆綽々有餘裕、忠恕所以稱絕藝、於是乎、知不虛也、舊藏于歸安陸氏存齋^④、近踰海東來歸笙洲阿部君寶度^⑤、蓋先是我邦未有藏忠恕畫者也、按宣和御府有明皇避暑宮圖四^⑥、此或其一歟、忠恕先洛陽人、七歲能誦書屬文、周廣順中召為宗正丞、改周易博士、宋太宗聞其名、召授國子監主簿、為人跣弛不羈、放浪縱酒、遇佳山水、輒淹留不去、或絕粒不食、後配流至齊州臨邑、謂部送吏曰、吾逝矣、遂卒、其體甚輕若蟬蛻焉、善書篆隸、所著汗

簡佩觿、皆為談字、學者所許重、宋史竝東坡集具有記載^⑦、而宣

和畫譜云、忠恕字國寶、不知何許人、恐失攷檢耳、聖朝名畫評

云、忠恕於人物不深留意、同邑王士元精丹青、與忠恕為畫友、

往往自為屋木、假士元寫人物於中、亦猶關仝求胡翼作人物於

山間、古人此類不少、固不足以為忠恕詬病也

昭和二年丁卯七月雨山長尾甲觀并識

「長尾甲印」(白文方印)「圖7・3・4」

「雨山」(朱文方印)

題簽「圖7・4」

郭恕先越王宮殿圖^⑧ 穰梨館藏^⑨

款記「圖7・5、原色圖版15」

恕先^⑩

鑑藏印「圖7・6、原色圖版16」

「過雲樓收藏印」朱文方印^⑪

注

(1) 郭恕先 郭忠恕(九三〇頃〜七七、あるいは九一〇頃〜七七以降)、字恕先(一説に國寶)。洛陽(河南省)の人。後漢(九四七〜九五

○)の湘陰公・劉贇に仕え、後周(九五―九六)では周易博士となる。監察御史の符昭文の彈奏により、乾州司戸參軍に降格したことをきっかけに出奔して、各地を放浪する。北宋の太宗(位九七―九九)に再び召され國子監主簿となるが、後、登州(山東省)に流され、途中の齊州(同前)で没。古代文字の研究に詳しく、「汗簡」、「佩觿」の書が傳わる。畫家としては屋木を得意とし、潑墨的な畫風でも知られる。また關全を師としたという。陶嶽『五代史補』(卷五)、『宋史』(卷四四二「郭忠恕傳」)、『蘇東坡集』(卷二〇「郭忠恕畫贊并序」)、『郭若虛』圖畫見聞志』(卷三)、『劉道醇』聖朝名畫評』(卷三)、『宣和畫譜』(卷八)など参照。

(2)明皇避暑宮 唐の玄宗(位七一―七五)の華清宮。繪畫化の例としては、唐代の蜀の僧侶畫家で「人物樓臺」を得意とした楚安が、大聖慈寺三學院大廳に描いた「明皇幸華清宮避暑圖」壁畫がある(黃休復『益州名畫錄』卷下)。郭忠恕の「明皇避暑宮圖」については、『宣和畫譜』卷八が「明皇避暑宮圖四」と記す。また、明後期には、嚴嵩(一四八〇―一五六七)から蘇州の王子貞の手に渡った、郭忠恕「明皇避暑宮圖」が知られていた。これは、初め「釣鰲圖」とされていたが、正徳十四年(一五一九)の文徵明(一四七〇―一五五九)跋によって「明皇避暑宮圖」に改められた。界畫樓閣の中に、欄干に寄りかかって木魚を釣る王者がいたという。本圖とは別本であろう(文嘉『鈴山堂書畫記』、張丑『清河書畫舫』卷六)。

(3)本圖の絹は幅五四・〇センチメートルの右絹と幅五一・六センチメートルの左絹を縫ぎ合わせている。

(4)陸氏存齋 陸心源(一八三四―九四)、『字剛甫、號存齋、歸安(浙江省)の人。著録の『穰梨館過眼錄』卷一に「郭忠恕唐明皇避暑宮圖軸」、「儀顧堂集 二集」に「郭忠恕唐明皇避暑宮圖軸」がある。

(5)筓洲阿部君 阿部房次郎(一八六八―一九三七)、號筓洲。

(6)前掲注(2)。

(7)周廣順中 後周・太祖の廣順年間(九五―九五)。

(8)宋太宗 趙匡義(九三九―九七)。北宋第二代皇帝。

(9)前掲注(1)。

(10)「郭忠恕、字國寶、不知何許人、(後略)」(『宣和畫譜』卷八)。

(11)王士元 北宋、汝南宛丘(河南省)の人。王仁壽の子。人物、山水、屋木をいづれもよくした。

(12)「(前略)而忠恕于人物不深留意、往往自為屋木、假士元寫人物于中以全美」(『聖朝名畫評』卷三)。

(13)關全 九〇七頃―九六〇頃。長安(西安)の人。山水をよくした。

(14)胡翼 五代梁、安定(甘肅省)の人。道釋人物、車馬樓臺をよくした。

(15)關全と胡翼の合作については、李廌『德隅齋畫品』、『宣和畫譜』卷一〇などに記述あり。「(前略)全畫山水入妙、然于人物非工、每有得意者、必使胡翼主人物(後略)」(『德隅齋畫品』)。

(16)昭和二年丁卯 一九二七年。

(17)雨山長尾甲 長尾甲(一八六四―一九四二)、號雨山。

(18)郭恕先越王宮殿圖 郭忠恕筆「越王宮殿圖」に、嚴嵩から朱節庵國公、さらに董其昌(一五五五―一六三六)に渡った没骨山水畫卷があり(文嘉『鈴山堂書畫記』、張丑『清河書畫舫』卷六、陳繼儒『妮古錄』卷四)、主題については、春秋戰國時代の越王・勾踐(？)前四六五)もしくは五代十國時代の吳越國王・錢鏐(八五二―九三二)とされていた。

(19)前掲注(4)。

(20)僞款とするのが現在の定説。本圖は元の王振鵬周邊の界畫様式と、李郭派山水様式を組みあわせた、元代の作品とされる。

(21)前掲注(4)。

[植松瑞希]

備考

鶴田武良「原田悟朗氏聞書 大正・昭和初期における中國畫コレクションの成立」(『日中國交正常化二〇周年記念 中國明清名畫展』圖録、日中友好會館、一九九二年)によれば、原田悟朗が北京で李成・王曉「讀碑窠石圖」と共に購入し、内藤湖南に眞っ先に見せたものという。

著録

陸心源『穰梨館過眼録』卷一、同前『儀顧堂集 二集』、阿部房次郎『爽籟館欣賞 第一輯』(博文堂、一九三〇年)

参考文献

- Osvald Siren, *Chinese Painting: Leading Masters and Principles*, London: Lund Humphries, New York: The Roman Press, c1956-1958
- 『大阪市立美術館藏 中國繪畫』(朝日新聞社、一九七五年)
- 曾布川寛「五代北宋初期山水畫の一考察―荊浩・關仝・郭忠恕・燕文貴―」(『東方學報』四九、一九七七年)
- 小川裕充「唐宋山水畫史におけるイマジネーション(上)・(中)・(下)」(『國華』一〇三四・一〇三五・一〇三六、一九八〇年)
- 鈴木敬『中國繪畫史 上』(吉川弘文館、一九八一年)
- 板倉聖哲「明皇避暑宮圖」解説(『元時代の繪畫―モンゴル世界帝國の一世紀―』大和文華館、一九九八年)
- 塚本麿充「明皇避暑宮圖」解説(『崇高なる山水―中國・朝鮮、李郭系山水畫の系譜―』大和文華館、二〇〇八年)

擔當者一覽

— 執筆 —

竹浪遠 (京都市立藝術大學准教授)

弓野隆之 (大阪市立美術館)

森橋なつみ (大阪市立美術館)

吳孟晉 (京都國立博物館)

植松瑞希 (東京國立博物館)

— 編集 —

西尾歩・弓野隆之・森橋なつみ

關西九館所藏 中國書畫錄 III (PDF版)

二〇一八年三月三十一日發行

編集・發行 關西中國書畫コレクション研究會

事務局所在地 一般財團法人 澄懷堂美術館

三重縣四日市市水沢町二〇一一

助成 公益財團法人 ポーラ美術振興財團

印刷・製本 株式會社 NPCコーポレーション

大阪市北區天滿一・九・一九